茨城県教育財団文化財調査報告第421集

髭釜遺跡
行人塚古墳

都市計画道路駅前海岸線整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第421集

髭釜遺跡
行人塚古墳

都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は，国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として，昭和52年に調査課が設置されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度，茨城県水戸土木事務所による都市計画道路駅前海岸線整備事業に伴って実施した，髭釜遺跡・行人塚古墳の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって，髭釜遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡や土坑を確認し，茨城県東部地域における当時の集落跡の一端などが，行人塚古墳では6世紀代の当地域における古墳築造時の様相が明らかになりました。

これらの成果は，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上のための資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から本書の刊行に至るまで，多大なご協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，大洗町教育委員会をはじめ，御指導，御協力をいただきました関係各位に対し，心から感謝申し上げます。

平成29年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長　野　口　　通

例　　言

1　本書は，茨城県水戸土木事務所の委託により，公益財団法人茨城県教育財団が平成 26・27 年度に発掘調査を実施した茨城県東茨城郡大洗町磯浜町 1358 番地ほかに所在する髭釜遺跡と，茨城県東茨城郡大洗町磯浜町 1113 番地 1 に所在する行人塚古墳の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

髭釜遺跡

調査　平成 26 年 12 月 1 日～ 12 月 31 日

　　平成 27 年 11 月 1 日～ 12 月 31 日

整理　平成 28 年 8 月 1 日～ 10 月 31 日

行人塚古墳

調査　平成 26 年 12 月 1 日～ 12 月 31 日

整理　平成 28 年 8 月 1 日～ 10 月 31 日

3　発掘調査は，調査課長白田正子のもと，以下の者が担当した。

平成 26 年度

首席調査員兼班長　　寺内久永

次 席 調 査 員　　兼子博史

調　　査　　員　　土生朗治　（有限会社毛野考古学研究所）

平成 27 年度

首席調査員兼班長　　寺内久永

次 席 調 査 員　　木村光輝

調　　査　　員　　天野早苗

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長後藤一成のもと，調査員天野早苗が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝＋35,200 m，Y＝＋65,560 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　P－ピット　SD－溝跡　SE－井戸跡　SI－竪穴建物跡　SK－土坑　TM－古墳

遺物　　DP－土製品・埴輪　M－銭貨　Q－石器

土層　　K－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1，各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

焼土・火熱痕・赤彩　　炉

粘土範囲　　柱当たり

●土器　○土製品　□石器　－－－－　硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm，cm，gで示した。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　竪穴建物跡の「主軸」は，炉・竈を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

7　今回の報告分で，整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更　平成26年度調査髭釜遺跡　SK1→SK65　SK2→SK66　SK3→SK67

欠番　PG 1・SK53

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
髭釜遺跡・行人塚古墳の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 4
第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　位置と地形 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　髭釜遺跡 …… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　基本層序 …… 10
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　１　弥生時代の遺構と遺物 …… 13
　　(1)　竪穴建物跡 …… 13
　　(2)　土坑 …… 36
　　２　室町時代の遺構と遺物 …… 37
　　井戸跡 …… 37
　　３　その他の遺構と遺物 …… 38
　　(1)　土坑 …… 38
　　(2)　溝跡 …… 40
　　(3)　遺構外出土遺物 …… 41
　第４節　まとめ …… 42
第４章　行人塚古墳 …… 45
　第１節　調査の概要 …… 45
　第２節　基本層序 …… 45
　第３節　遺構と遺物 …… 47
　　１　古墳時代の遺構と遺物 …… 47
　　古墳 …… 47
　　２　その他の遺物 …… 52
　　遺構外出土遺物 …… 52
　第４節　まとめ …… 53
写真図版 …… PL 1 ～ PL10
抄　録

髭釜遺跡・行人塚古墳の概要

遺跡の位置と調査の目的

髭釜遺跡と行人塚古墳は，大洗町北東部に位置し，涸沼川右岸の標高７～９ｍの低台地上に立地しています。

都市計画道路駅前海岸線の事業に先立ち，遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため，公益財団法人茨城県教育財団が平成26年度に髭釜遺跡と行人塚古墳を合わせて190㎡，平成27年度に髭釜遺跡の1,074㎡について発掘調査を行いました。

髭釜遺跡の調査の内容と成果

調査の結果，竪穴建物跡８棟（弥生時代），井戸跡１基（室町時代），土坑66基（弥生時代１，時期不明65），溝跡２条（時期不明）を確認しました。主な出土遺物は弥生土器（高坏・浅鉢・広口壺），土師質土器（小皿），陶器（鉢），石器（石皿・磨石・敲石・台石・炉石），土製品（紡錘車）などです。

髭釜遺跡遠景　（東から）

髭釜遺跡は昭和50年代の発掘調査によって，弥生時代後期の大集落跡であることが確認されています。今回の調査では，同時期の竪穴建物跡８棟を確認し，集落の一端を明らかにすることができました。調査区は太平洋側へ向かって傾斜していくことから，おそらく集落の東端にあたると考えられます。

竪穴建物跡からは，初期の十王台式の土器が多く出土しており，その中央には，当時の人々が煮炊きで使っていた炉が付設されていました。炉には火が燃えやすくなるように石が据えられており，当時の人々の生活の様子をうかがい知ることができます。

石の置かれた炉のある竪穴建物跡

出土した弥生土器の広口壺

行人塚古墳の調査の内容と成果

古墳１基を確認しました。後世には塚として利用されたため，墳丘や周辺部が削平されており，周溝や埋葬施設などは確認できませんでした。周辺からは埴輪片が多く出土しています。円筒埴輪のほか，弓矢をいれる道具をかたどった靫や，身分のある人に差し掛けるうちわや日傘をかたどった翳と呼ばれる器材埴輪の一部も確認できました。県内では器材埴輪の出土例は少ないため，貴重な資料です。当時は，様々な埴輪が墳丘に並べられていたと推測できます。

出土した埴輪片（靫・翳）

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は都市計画道路駅前海岸線整備を行っている。

平成24年7月23日，茨城県水戸土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに都市計画道路駅前海岸線整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成25年3月22日に現地踏査を実施した。

平成25年7月30日・平成26年8月28日に行人塚古墳，平成25年7月30日・平成26年8月28日・平成27年6月15・22・30日に髭釜遺跡の試掘調査をそれぞれ実施した。

平成26年10月8日に行人塚古墳，平成26年10月8日・平成27年7月8日に髭釜遺跡について，茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに，事業地内に両遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成26年10月9日に行人塚古墳，平成26年10月9日・平成27年7月14日に髭釜遺跡に関して，茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。

これを受けて，茨城県教育委員会教育長は，茨城県水戸土木事務所長あてに，現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成26年10月14日に行人塚古墳，平成26年10月14日・平成27年7月28日に髭釜遺跡について工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年10月6日に行人塚古墳，平成26年10月6日・平成27年8月6日に髭釜遺跡に関して，茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに，都市計画道路駅前海岸線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。

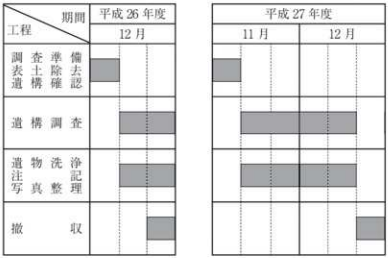
平成26年10月16日に行人塚古墳，平成26年10月16日・平成27年8月6日に髭釜遺跡について，茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに，それぞれ発掘調査の範囲及び面積について回答した。併せて，調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は，茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，行人塚古墳については平成26年12月1日から12月31日まで，髭釜遺跡については平成26年12月1日から12月31日及び平成27年11月1日から12月31日までの発掘調査をそれぞれ実施した。

第2節 調 査 経 過

髭釜遺跡の調査は，平成26年度が平成26年12月1日から12月31日まで，平成27年度が平成27年11月1日から12月31日までの3か月間にわたって，行人塚古墳の調査は，平成26年12月1日から12月31日までの1か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。

髭釜遺跡



行人塚古墳

第2章　位　置　と　環　境

第1節　位　置　と　地　形

髭釜遺跡は茨城県東茨城郡大洗町磯浜町1358番地ほかに，行人塚古墳は茨城県東茨城郡大洗町磯浜町1113番地1に所在している。

大洗町は茨城県東部に位置しており，町域は南北に長く，東は太平洋，西は笠間市国見山を源とする涸沼川，北は那須茶臼岳を源とする那珂川にそれぞれ面している。西側を流れる涸沼川は涸沼から北東へ流れ，河口付近で那珂川へ合流している。地形は，鹿島台地とよばれる標高30～40mの洪積台地と，涸沼川などによって形成された河岸段丘の微高地，涸沼・涸沼川沿岸にみられる沖積低地と太平洋沿岸の海岸砂丘などに大別される。

台地の地質は，石崎層や多賀層，大洗層を基盤とし，下半部は砂や礫，上半部はシルトや砂質シルトが層をなす見和層で形成されている。その上位には，常総粘土層，関東ローム層が順に堆積し，表土に至っている[1]。低地は，那珂川や涸沼川の河川の働きによって運ばれた礫や砂泥などが堆積して形成されている。

髭釜遺跡は，涸沼川最下流部右岸の標高7～9mの低台地に立地しており，今回の調査区の東部から太平洋に向かって緩やかに傾斜している。また，行人塚古墳は髭釜遺跡の東端である太平洋を望む微段丘上に立地している。調査前の現況は，宅地・塚である。

第2節　歴　史　的　環　境

大洗町には，縄文時代から江戸時代までの大小97の遺跡が確認されている[2]。その多くは涸沼川と太平洋に挟まれた台地上に立地しており，恵まれた水系のもと古くから人々が生活を営んできた地域である。

旧石器時代の遺跡は明確ではないが，町の北部に位置するドンドン山遺跡〈40〉，磐船遺跡から6点の石器が地表から採集されている。このことから，町域の台地上には旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。

縄文時代草創期・早期の遺跡としては，那珂川河口付近に位置する二葉町遺跡〈37〉，磐船山遺跡〈39〉，ドンドン山遺跡が確認されており，田戸下層式などの土器が出土している。

前期になると町の北部である磯浜地区に遺跡が増加し，鵜十堀貝塚〈3〉，吹上貝塚〈8〉，磐船山遺跡，ドンドン山遺跡などが，南部の大貫地区からは栗林遺跡〈44〉が確認されている。鵜十堀貝塚は，汽水域に生息するヤマトシジミが主体となっており，縄文海進が一番進んだ前期の時期においては，現在の低地部や河川の奥まで海水が流入していたということが推測される。

中期では，一本松遺跡〈5〉，団子内遺跡〈6〉，吹上遺跡〈9〉，釜堀遺跡〈17〉，中畑遺跡〈42〉，千天遺跡[3][4]〈55〉，稲荷前遺跡〈60〉，古内遺跡〈61〉，登城遺跡〈68〉，などが確認されている。千天遺跡からは，昭和53・54年の発掘で中期後葉（加曽利EⅡ式）の竪穴建物跡1棟が確認されているほか，平成24年に当財団が発掘調査を行った際には，中期後葉（加曽利E式期）の竪穴建物跡2棟などが確認されている。北部の磯浜地区では中期の，大洗台地の北部から南へと，大貫地区では，中期の遺跡数が増加している。

後期では大貫地区に遺跡数が増加し，一本松遺跡，千天遺跡，大貫落神南貝塚〈67〉，大貫落神北貝塚〈69〉，常福寺遺跡〈70〉が確認されている。大貫落神南貝塚と大貫落神北貝塚は外洋性のハマグリや汽水性のヤマト

シジミなどが主体となっており良好な食糧生産の場であったと考えられる。また，土器の他に動物遺体，石製品，貝製品，骨格製品，歯牙製品なども多く出土している。

弥生時代の遺跡としては，髭釜遺跡[5]〈2〉，団子内遺跡[6]，一本松遺跡[7]，米蔵地遺跡〈12〉，官女平遺跡〈24〉，長峯遺跡[8]〈25〉，ヘロ内遺跡〈26〉，千天遺跡，南藤太郎遺跡〈56〉磐船山遺跡などがある。髭釜遺跡では，これまでの発掘調査で確認された竪穴建物跡が200棟にのぼり，後期の大集落跡であることが知られている。また，団子内遺跡からは11棟，米蔵地遺跡からは4棟，一本松遺跡からは82棟の竪穴建物跡が確認されており，3遺跡は連続する同一台地上に近接して存在していることから，一体化した遺跡群であり，髭釜遺跡と東西双壁をなす，弥生時代の一大集落であったと考えられる。また，一本松遺跡からは巴形銅器が出土している。町の南部では，千天遺跡から昭和55年の調査と平成24年に行われた当財団の調査と合わせて22棟，近接する南藤太郎遺跡から27棟の竪穴建物跡が確認され，集落が点在していたと考えられる。後期は涸沼・涸沼川沿岸に面する台地上に大集落を形成し，生活していたことが推測される。

古墳時代になると，町域の台地上には古墳が築造されるようになり，当遺跡の東部には磯浜古墳群が確認されている。磯浜古墳群は，直径88mの円墳である車塚古墳〈13〉，全長103.5mの前方後円墳である日下ヶ塚（鏡塚）古墳[9][10]〈14〉，全長63mの前方後円（方）墳である坊主山古墳，全長30mの円墳である姫塚古墳，現在では煙滅してしまった数基の円墳で形成されており，古墳時代前期後半から中期前半にかけて築造されたと考えられる。日下ヶ塚（鏡塚）古墳では，粘土槨内部から木棺材や遺骸と共に鏡2面，4000点以上の玉類，石製模造品や直刀などの鉄製品，木製櫛などが見つかっているほか，墳丘上からは円筒埴輪・壺型埴輪が採集されている。車塚古墳は三段築成で，葺石も確認されており，墳丘からは朝顔形埴輪・円筒埴輪・壺型埴輪が出土している。集落跡としては，髭釜遺跡，長峯遺跡，一本松遺跡，団子内遺跡，吹上遺跡，千天遺跡などで竪穴建物跡が確認されており，古墳群の築造に関わった人々の存在がうかがえる。

律令期になると，当地域は鹿島郡に属し，北部の宮田郷と南部から鉾田市の北部を含めた大屋郷の二つに分かれていた。集落跡としては，団子内遺跡，一本松遺跡，千天遺跡において竪穴建物跡が確認されている。千天遺跡の遺物包含層からは「大屋厨」と書かれた墨書土器が出土しており，大屋郷に属していたことを示している。

中世では，常福寺遺跡，町の南部に位置する小館遺跡[11]，一杯館跡〈76〉などがある。小館遺跡では，3条の空濠と2条の土塁が存在し，大きく2つの郭から形成されていると考えられる。また，一杯館跡は，周囲を断崖で囲まれた自然の要塞で，大貫氏の築城と伝えられている。江戸時代では，南部に松川陣屋跡があり，当時の建物跡の礎石が残り，江戸時代の守山藩の陣屋跡が確認されている。

註

1）大洗町史編さん委員会『大洗町史』大洗町　1986年3月

2）茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会　2001年3月

3）村田健二編『千天　鹿島線に伴う埋蔵文化財調査報告書』大洗地区遺跡発掘調査会　1980年3月

4）寺内久永『千天遺跡　主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財団文化財調査報告』第384集　2014年3月

5）井上義安編『髭釜　鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会　1980年3月

6）大洗町団子内遺跡発掘調査会編『団子内　五反田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要』大洗町団子内遺跡発掘調査委員会　1987年9月

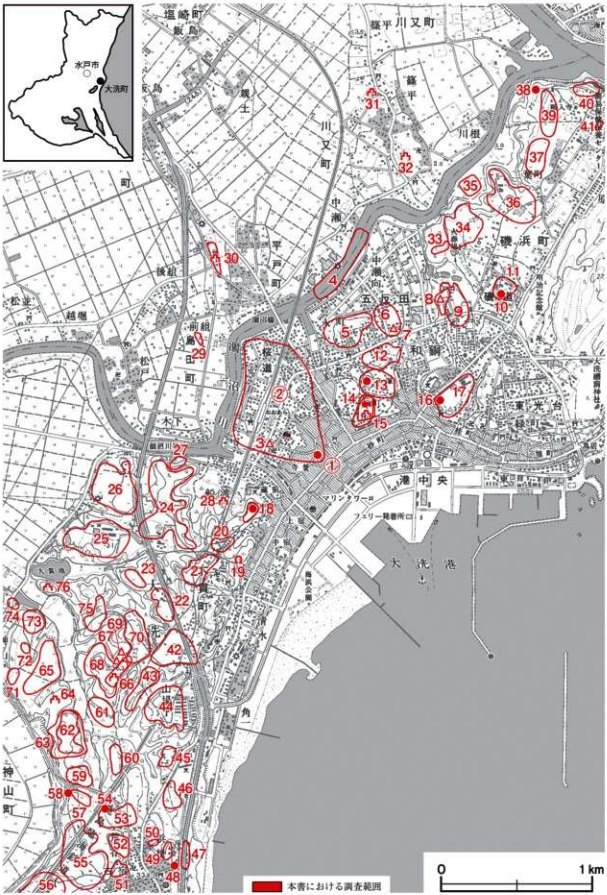
7）井上義安編著『一本松遺跡』茨城県大洗町一本松埋蔵文化財発掘調査会　2001年3月

8）大洗町長峯調査団『茨城県大洗町長峯遺跡』『大洗町文化財調査報告書』第4集　1973年12月

9）大場磐雄・佐野大和『常陸塚』総宮舎　1956年3月

10）大洗町教育委員会『日下ヶ塚（常陸塚）古墳』『大洗町文化財調査報告書』第18集　大洗町教育委員会　2015年3月

11）寺門義範『茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告書－中世城郭の研究－』大洗地区遺跡発掘調査会・日本文化財研究所　1978年5月

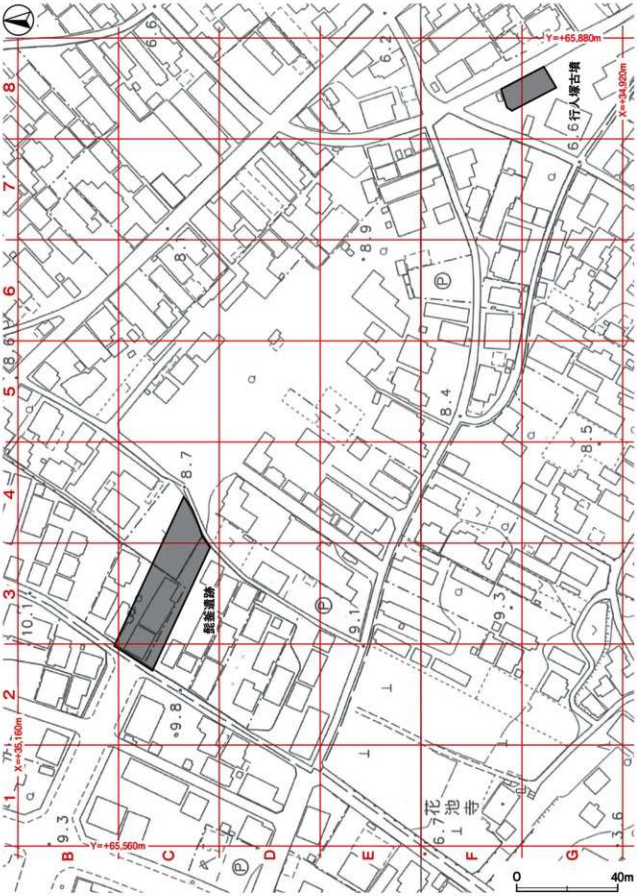


第1図　髭釜遺跡・行人塚古墳周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「ひたちなか」）

表1　髭釜遺跡・行人塚古墳周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	行人塚古墳				○			
②	髭釜遺跡		○	○	○	○	○	
3	勘十堀貝塚		○					
4	涸沼川河床遺跡		○	○	○	○		○
5	一本松遺跡		○	○	○	○		○
6	団子内遺跡		○	○	○	○		
7	白畑貝塚		○					
8	吹上貝塚		○					
9	吹上遺跡		○	○	○	○		
10	上ノ山古墳				○			
11	上ノ山遺跡			○		○		
12	米蔵地遺跡		○	○	○	○	○	○
13	車塚古墳群				○			
14	日下ヶ塚（鏡塚）古墳				○			
15	望洋館・磯浜海軍陣屋							○
16	寺家上古墳				○			
17	釜堀遺跡		○	○				
18	富士山古墳				○			
19	権現坂				○			
20	富士ノ腰遺跡			○	○	○		
21	寺ノ上遺跡			○	○	○		
22	中丸平遺跡		○	○	○	○		
23	鬼窪遺跡			○	○			
24	宮女平遺跡			○	○	○		
25	長峯遺跡			○	○	○		
26	ヘロ内遺跡			○	○	○		
27	船渡遺跡			○	○			
28	ウツギ崎砦跡						○	
29	大道端遺跡			○	○			
30	平戸遺跡						○	
31	川又館跡						○	
32	観音堂土塁跡						○	
33	宮田下遺跡			○	○	○		
34	宮田遺跡			○	○	○		
35	双葉町下養蚕所遺跡		○	○				
36	前坏遺跡			○	○	○		
37	二葉町遺跡		○	○	○	○		
38	磬船山古墳				○			

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
39	磬船山遺跡	○	○	○		○		
40	ドンドン山遺跡	○	○	○				
41	祝町Ⅱ遺跡		○					
42	中畑遺跡		○			○		
43	飛城遺跡				○	○		
44	栗林遺跡		○		○	○		
45	御中山遺跡		○		○			
46	矢場久保遺跡						○	
47	夏海浜欠台場跡							○
48	塩見塚古墳				○			
49	今神遺跡				○			
50	蒲沼遺跡		○		○			
51	浦地畑遺跡			○	○		○	
52	田神遺跡		○		○	○		
53	天神西遺跡		○	○	○	○	○	
54	宮久保古墳				○			
55	千天遺跡		○	○	○	○		
56	南藤太郎遺跡		○	○	○	○		
57	神ノ前遺跡					○		
58	神ノ下古墳				○			
59	清瀬遺跡			○	○	○		
60	稲荷前遺跡		○	○	○	○		
61	古内遺跡		○					
62	後新古屋遺跡			○	○	○		
63	後新古屋館跡						○	
64	龍貝館跡						○	
65	天子遺跡		○	○	○	○		○
66	登城館跡						○	
67	大貫落神南貝塚		○					
68	登城遺跡		○	○	○	○	○	
69	大貫落神北貝塚		○					
70	常福寺遺跡		○	○	○	○	○	○
71	神山塙遺跡		○					
72	前峯遺跡			○				
73	蜂内遺跡		○	○	○			
74	椿山遺跡		○	○				
75	落神遺跡		○	○	○	○	○	○
76	一杯館跡						○	



第２図　髭釜遺跡・行人塚古墳調査区設定図（大洗町都市計画図 2,500 分の１）

第3章　髭　釜　遺　跡

第1節　調　査　の　概　要

髭釜遺跡は，茨城県東茨城郡大洗町の北東部に位置し，涸沼川右岸の標高7～9ｍの台地上に立地している。遺跡は南北約750ｍ，東西約580ｍの台形の範囲である。大洗鹿島線敷設や大洗駅周辺の区画整備の際に，大規模な発掘調査が行われており，約350棟の弥生時代後期を中心とした竪穴建物跡が確認され，大集落跡であったことが分かっている。今回の調査区は遺跡の南東部に位置し，平成27年度調査区は東部から太平洋に向かって傾斜していることから，集落の東端であると考えられる。調査面積は，平成26年度に行人塚古墳を含めて190㎡，平成27年度に1,074㎡である。調査前の現況は宅地・塚である。

調査の結果，竪穴建物跡8棟（弥生時代），井戸跡1基（室町時代），土坑66基（弥生時代1，時期不明65），溝跡2条（時期不明）を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）に20箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢・浅鉢），弥生土器（高坏・浅鉢・広口壺・皿状土器），土師質土器（小皿），陶器（鉢），土製品（土玉・管状土錘・紡錘車），埴輪（形象・円筒），石器（石皿・磨石・敲石・台石・炉石）などである。

第2節　基　本　層　序

平成26年度調査区は，第66号土坑の北西壁と，第1号井戸跡の北西壁及び南側トレンチの土層を参考に基本層序（第3図）を記録した。

平成27年度調査区は，北東部の調査区東部の台地上の平坦面（C 4 f2 区）に設定した。

平成26年度

第1層は，黒色を呈する旧表土である。粘性は弱く，締まりは強く，層厚は40㎝である。

第2層は，暗褐色を呈する旧表土である。粘性は普通で，締まりは強く，層厚は16㎝である。

第3層は，褐色を呈するローム層への漸移層である。粘性は普通で，締まりは強く，層厚は14㎝である。

第4層は，明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は弱く，締まりは普通で，層厚は34㎝である。

第5層は，明黄褐色を呈するハードローム層である。酸化小ブロックと黒色粒子を少量含み，粘性は普通で締まりは強く，層厚は18㎝である。

第6層は，浅黄橙色を呈するハードローム層である。粘性・締まりはともに強く，層厚は10㎝である。

第7層は，灰白色を呈する粘土層である。粘性・締まりはともに強く，層厚は34㎝である。

第8層は，浅黄橙色を呈する粘土層である。酸化小ブロックを中量含み，粘性・締まりはともに普通で，層厚は22㎝である。

第9層は，橙色を呈する砂質土層である。粘性はなく，締まりは弱く，層厚は84㎝である。

第10層は，橙色を呈する砂礫混土層である。粘性はなく，締まりは弱い。層厚は26㎝まで確認したが，下層は未掘のため不明である。

平成27年度

第1層は，黒褐色を呈する耕作土で，ソフトロームへの漸移層である。ロームブロックを少量含み，粘性は

普通で締まりは弱く，層厚は 20 ～ 36cmである。

第２層は，褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりはともに普通で，層厚は 50 ～ 62cmである。

第３層は，褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で，締まりは強く，層厚は 37 ～ 54cmである。

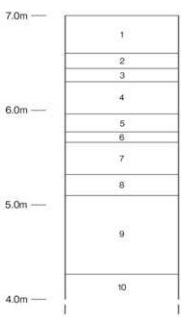
第４層は，黄褐色を呈する鹿沼パミス層である。白色砂粒を少量に含み，粘性は弱く，締まりは普通，層厚は９～ 19cmである。

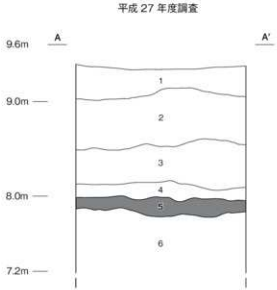
第５層は，にぶい黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼パミス粒子と白色砂粒を少量含んでおり，粘性は普通で，締まりは強く，層厚は 12 ～ 20cmである。第２黒色帯と考えられる。

第６層は，褐色を呈するハードローム層である。白色砂粒を微量に含んでおり，粘性は普通で，締まりは強い。層厚は 66cmまで確認したが，下層が未掘のため層厚は不明である。

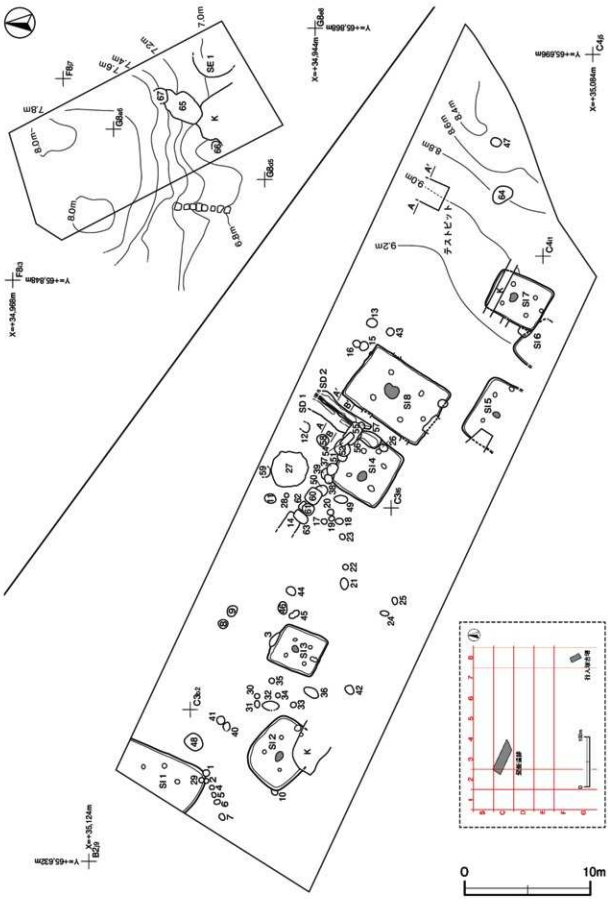
なお，遺構は，第２層の上面で確認した。

また，平成 26 年度の第４層と平成 27 年度の第３層は対応する。





第３図　基本土層図



第４図　髭釜遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴建物跡８棟と土坑１基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第５～８図 PL１・２）

位置 調査区西部のＣ２a0区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

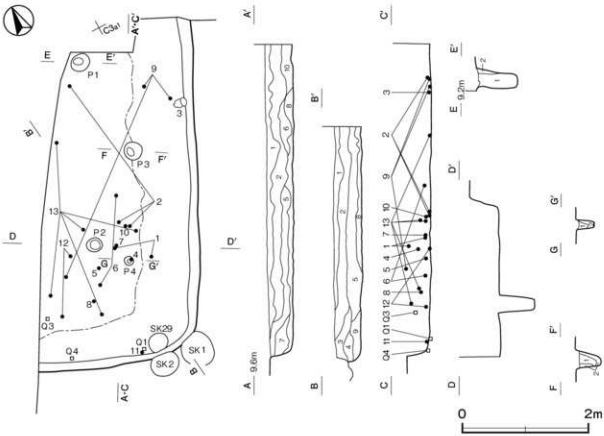
重複関係 第１・２・29号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部から西部にかけてが調査区域外へ延びているため，確認できたのは南北軸5.42 m，東西軸2.50 mである。方形もしくは長方形と推測でき，推定主軸方向はＮ－66°－Ｗである。壁は高さ42～45cmで，ほぼ直立している。

床 平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット ４か所。Ｐ１は深さ66cm，Ｐ２は深さ57cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ３は深さ40cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ４は深さ30cmで，規模と配置から補助柱穴と考えられる。第１層は柱痕跡，第２層は埋土である。

ピット土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子微量　　2 褐 色 ロームブロック中量



第５図 第１号竪穴建物跡実測図

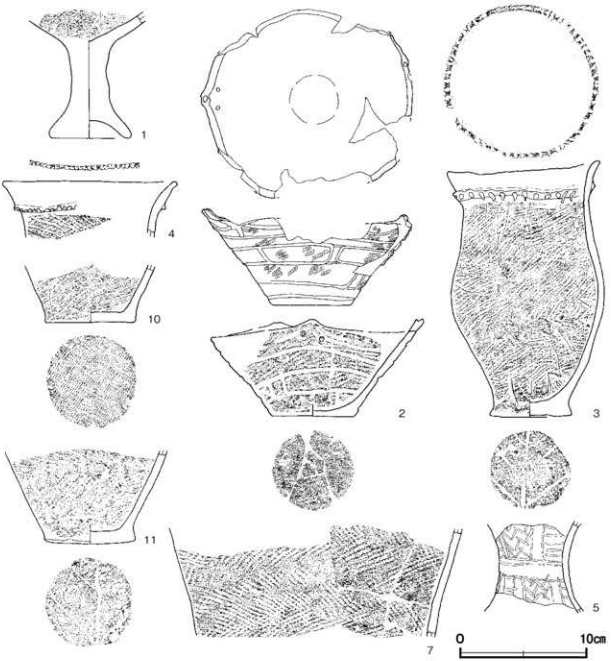
覆土　10層に分層できる。ロームブロックを多く含む層が不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

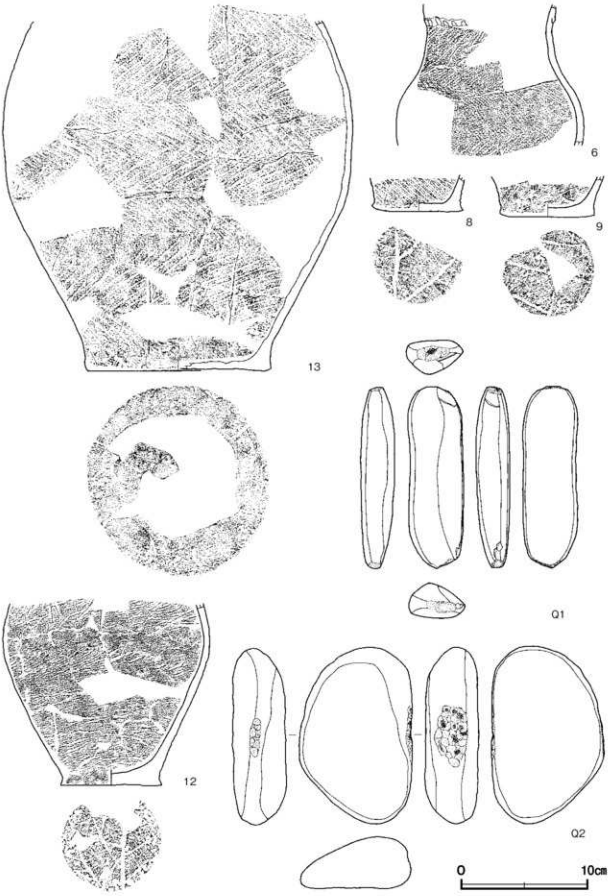
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量
8　褐　　色　ロームブロック中量
9　黒　褐　色　ロームブロック中量
10　黒　褐　色　ローム粒子微量

遺物出土状況　弥生土器片461点（高坏1，浅鉢1，広口壺459），石器21点（磨石4，敲石11，凹石1，台石5），剥片（メノウ）3点，自然礫9点，メノウ原石2点が出土している。3は東壁際から斜位で出土している。1・2・6・9・12・13は，建物跡内部に広く散っていた破片が接合していることから，投棄されたものと考えられる。

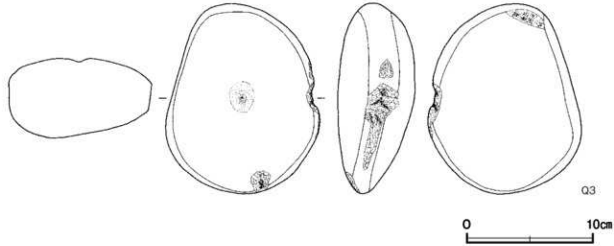
所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。

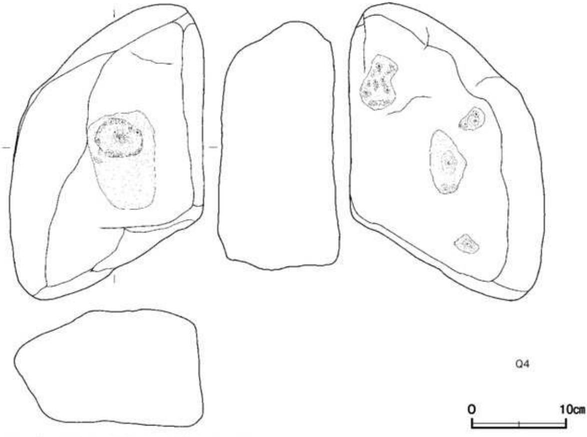


第6図　第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第7図　第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)





第８図　第１号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第６～８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	高坏	－	(9.9)	[6.1]	長石・石英	にぶい橙	普通	坏部単節縄文LR施文　脚部上位縦方向のナデ　脚部下位横方向のナデ	覆土上～下層	60%　PL 7
2	弥生土器	浅鉢	16.8	7.7	6.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	変形工字文　口縁部３か所の穿孔　単節縄文RLを横位・斜位で施文　底部砂目痕	床面	80%　PL 7
3	弥生土器	広口壺	12.0	20.2	6.5	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部原体による押圧　口縁部刻み目のある隆起線　附加条二種縄文を横位・斜位で施文　底部木葉痕	床面	100%　PL 6
4	弥生土器	広口壺	[13.7]	(4.5)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部刻み目　複合口縁下端部に押圧　頸部に附加条二種（附加１条）縄文施文	覆土中層	5％
5	弥生土器	広口壺	－	(7.3)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	頸部棒状工具による縦区画　区画内に波状文と山形文	覆土下層	20%
6	弥生土器	広口壺	－	(11.1)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	複合口縁下端部棒状工具による押圧　頸部から胴部にかけて附加条一種（附加２条）縄文を羽状構成で施文	覆土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
7	弥生土器	広口壺	－	(8.6)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	単節縄文LR（横）を羽状構成で施文	覆土下層	20%
8	弥生土器	広口壺	－	(2.9)	7.2	長石・石英・針状物質	にぶい橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文　底部本葉痕	覆土中層	10%
9	弥生土器	広口壺	－	(3.3)	7.5	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文施文　底部本葉痕	覆土上～下層	20%
10	弥生土器	広口壺	－	(4.5)	7.0	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文施文　底部本葉痕	覆土下層	20%
11	弥生土器	広口壺	－	(7.3)	7.3	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文　底部本葉痕	床面	40%
12	弥生土器	広口壺	－	(14.4)	8.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口段多条（直前段反撚り）縄文施文　底部本葉痕	覆土下層～床面	45%
13	弥生土器	広口壺	－	(27.6)	14.3	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文　底部砂目痕	覆土上層～床面	50%　PL 6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	敲石	14.3	4.5	27	245.8	粘板岩	両端部に敲打痕を有する	床面	
Q 2	敲石	13.9	9.0	4.2	712.3	砂岩	両側縁部に敲打痕を有する	覆土中	PL 8
Q 3	敲石	15.1	12.2	6.2	1,435	砂岩	わずかな凹部を有する　片側縁部に敲打痕を有する	覆土中層	
Q 4	台石	30.9	20.4	12.6	10,800	礫岩	両面に痕痕状の凹部	床面	PL 8

第２号竪穴建物跡（第９・10図　PL ２）

位置　調査区西部のＣ３c1区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　第10号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　南コーナー部は撹乱を受けているが，長軸5.41 m，短軸4.45 mの長方形で，主軸方向はN－57°－Wである。壁は高さ30～40cmで，ほぼ直立している。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。

炉　中央部に付設されている。長径82cm，短径60cmの不整楕円形で，深さ約８cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ，炉床面には粘土塊が据えられている。火熱を受け，変色し脆くなっていることから，炉石の代用とみられる。第３層上面が炉床面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，粘土ブロック少量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ42～46cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ４は深さ15cm，Ｐ５は深さ30cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５は底面から柱当たりが確認できた。第１・２層は柱痕跡，第３層は埋土である。

ピット土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量
3　褐　　色　ロームブロック中量

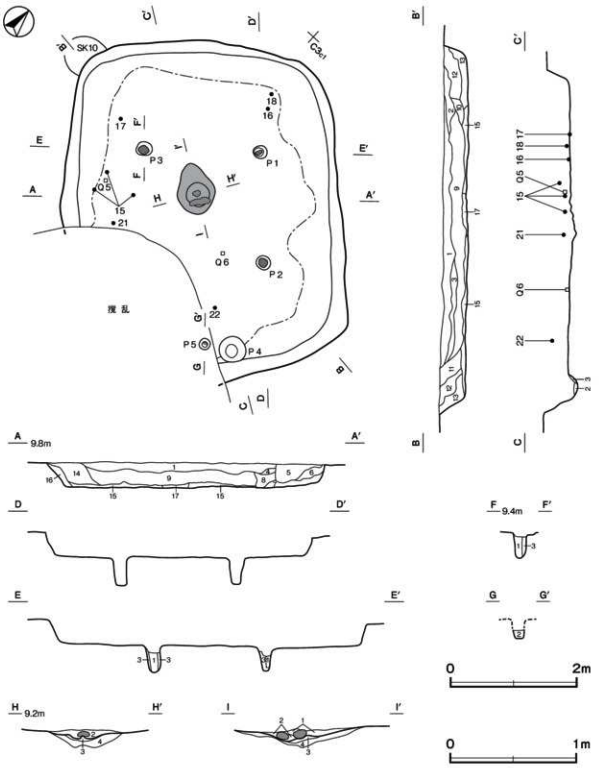
覆土　17層に分層できる。第４～17層はロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子などを含み，不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第１～３層は，レンズ状の堆積を示していることから，窪地に周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

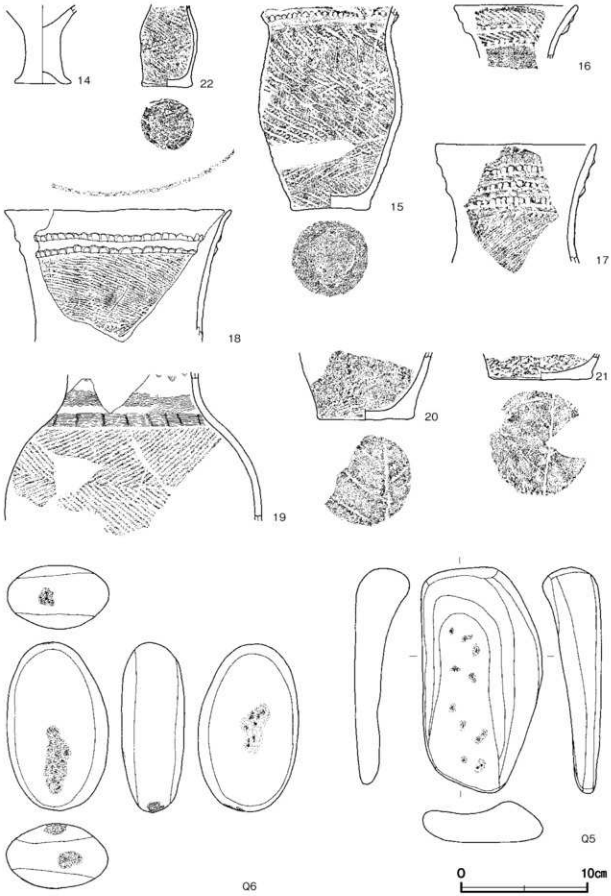
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量
8　黒　褐　色　ローム粒子中量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
10　暗　褐　色　ロームブロック微量
11　黒　褐　色　ロームブロック微量
12　暗　褐　色　ロームブロック中量
13　暗　褐　色　ロームブロック多量
14　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
15　褐　　色　ロームブロック中量
16　褐　　色　ロームブロック多量
17　黒　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　弥生土器片 608 点（高坏 1，広口壺 607），石器 14 点（石皿 1，磨石 3，敲石 8，炉石 2），剥片 2 点，自然礫 7 点が出土している。15 は，西壁際中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。22 は覆土上層から逆位で出土している。主に破片が壁際から散在した状態で出土している。また，覆土下層から自然礫が出土していることから，屋根材を押さえるために使われていたものが落ちた可能性がある。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第 9 図　第 2 号竪穴建物跡実測図



第10図　第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

第２号竪穴建物跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
14	弥生土器	高坏	－	(6.2)	[4.5]	長石・石英	にぶい褐	普通	脚部ナデ調整	覆土中	60% PL７
15	弥生土器	広口壺	－	(16.1)	6.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部棒状工具による押圧のある隆帯１条 胴部附加条二種（附加１条）縄文による羽状構成 底部糸切痕	覆土中層	70% PL６
16	弥生土器	広口壺	[9.5]	(4.2)	－	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐	普通	口縁部附加条一種（附加２条）縄文施文 下端原体による押圧 胴部櫛歯状工具（４本）による波状文 底部糸切痕	床面	5%
17	弥生土器	広口壺	[12.6]	(9.4)	－	長石・石英	灰褐	普通	口縁部棒状工具による押圧のある隆帯３条 胴部附加条二種（附加２条）縄文施文	床面	10%
18	弥生土器	広口壺	[17.8]	(10.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部原体による押圧 頸部上位に押圧のある隆帯２条 胴部附加条二種（附加２条）縄文	覆土下層	20%
19	弥生土器	広口壺	－	(11.3)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具（11本）による波状文と棗状文 胴部附加条一種（附加２条）縄文による羽状構成	覆土中	20%
20	弥生土器	広口壺	－	(5.3)	7.6	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文 底部木葉痕	覆土中	20%
21	弥生土器	広口壺	－	(2.1)	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文 底部木葉痕	覆土中層	20%
22	弥生土器	広口壺	－	(6.5)	4.0	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文による羽状構成 底部木葉痕	覆土上層	90% PL７

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q５	石皿	17.9	9.6	4.3	826.9	安山岩	10か所の小さな凹みを有する	覆土中層	
Q６	敲石	13.4	8.1	5.1	799.0	安山岩	両面・両端部に敲打痕を有する	覆土下層	PL８

第３号竪穴建物跡（第11･12図　PL２）

位置　調査区西部のＣ３d３区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　第３号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.94ｍ，短軸3.56ｍの長方形で，主軸方向はＮ－28°－Ｅである。壁は高さ30～34cmで，ほぼ直立している。

床　平坦で，南東部が踏み固められている。

炉　中央部に付設されている。長径58cm，短径43cmの楕円形で，深さ５cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ，炉床面には石が据えられている。第３層上面が炉床面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ53～58cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ15cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第１・２層は柱痕跡，第３・４層は埋土である。

ピット土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　色　ロームブロック多量
4　褐　色　ロームブロック中量

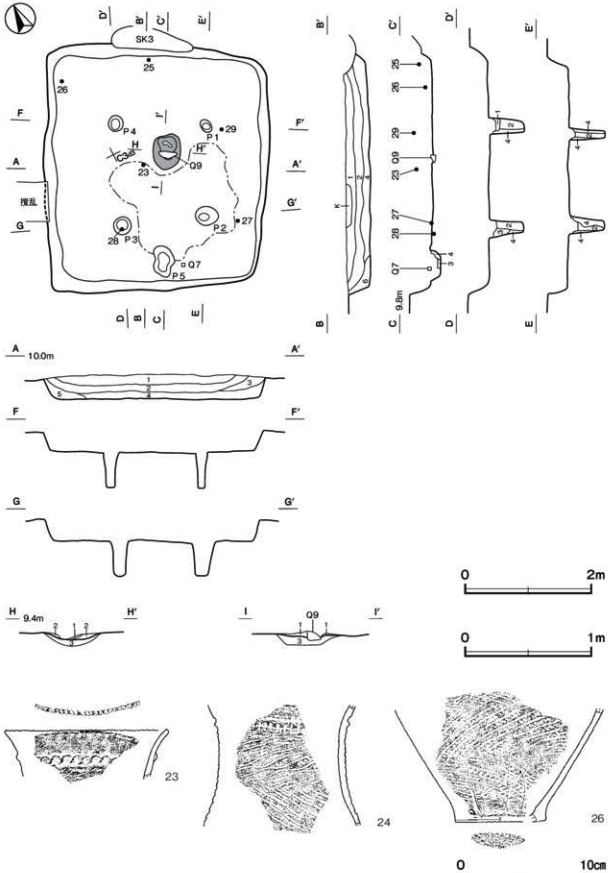
覆土　６層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

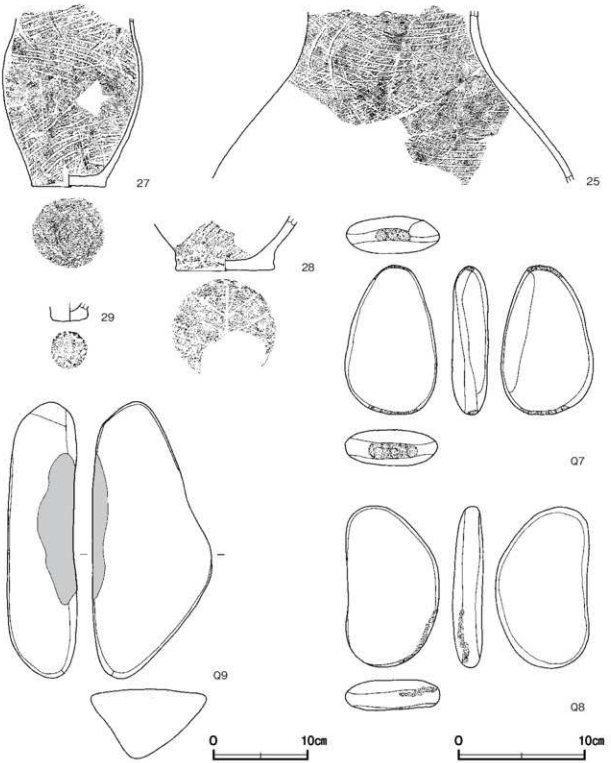
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量
6　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　弥生土器片224点（広口壺），石器８点（磨石１，敲石５，炉石２），剥片１点が出土している。土器片のほとんどは細片で，北壁際の覆土上層から散在した状態で出土している。27は，南東部の床面から横位で出土している。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第 11 図　第 3 号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第12図　第３号竪穴建物跡出土遺物実測図

第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（第11・12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
23	弥生土器	広口壺	[12.8]	(4.0)	－	長石・石英	灰褐	普通	口唇部原体押圧　口縁部押圧のある隆帯１条 胴部附加条二種（附加１条）縄文	覆土上層	5％
24	弥生土器	広口壺	－	(9.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横位工具による押圧のある隆帯１条 胴部附加条二種（附加１条）縄文による羽状構成	覆土中	5％
25	弥生土器	広口壺	－	(13.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文による羽状構成	覆土上層	10％

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
26	弥生土器	広口壺	－	(8.9)	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成　底部砂目痕	覆土下層	10%
27	弥生土器	広口壺	－	(13.4)	5.8	長石・石英	灰褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文による羽状構成　底部砂目痕	床面	60%　PL 6
28	弥生土器	広口壺	－	(4.3)	8.0	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条二種（附加2条）縄文を施文　底部木葉痕	P 3 上層	10%
29	弥生土器	広口壺	－	(1.5)	2.6	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	底部砂目痕	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	敲石	11.7	7.4	2.9	343.2	砂岩	両端部にわずかな敲打痕を有する	床面	
Q 8	敲石	12.8	7.4	2.4	330.3	砂岩	側縁部に敲打痕を有する	覆土中	
Q 9	炉石	29.2	12.6	7.3	3,345	砂岩	火熱を受けた痕跡を有する	炉床面	PL 8

第４号竪穴建物跡（第13～15図　PL３）

位置　調査区中央部のＣ３e6区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　北側から南東側にかけては，第26･37 ～ 39･51･52･54 ～ 57号土坑，第１号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.36ｍで，短軸は上端が攪乱を受けているが4.70ｍと推定できる。方形もしくは長方形と推測でき，主軸方向はＮ－57°－Ｗである。壁は高さ20 ～ 28cmで，ほぼ直立している。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。

炉　中央部の北西寄りに付設されている。径86cmほどの円形で，深さ15cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ，炉床面には石が据えられている。第４層上面が炉床面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
3　暗　赤　褐　焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量
4　褐　　色　ロームブロック中量

ピット　11か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ52 ～ 62cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ47cmで，規模と配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６～Ｐ11は深さ18 ～ 36cmで，規模と配置から補助柱穴であると考えられる。Ｐ３～Ｐ５では，底面から柱当たりが確認できた。第１・２層は柱痕跡，第３・４層は埋土である。

ピット土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量
4　褐　　色　ロームブロック中量

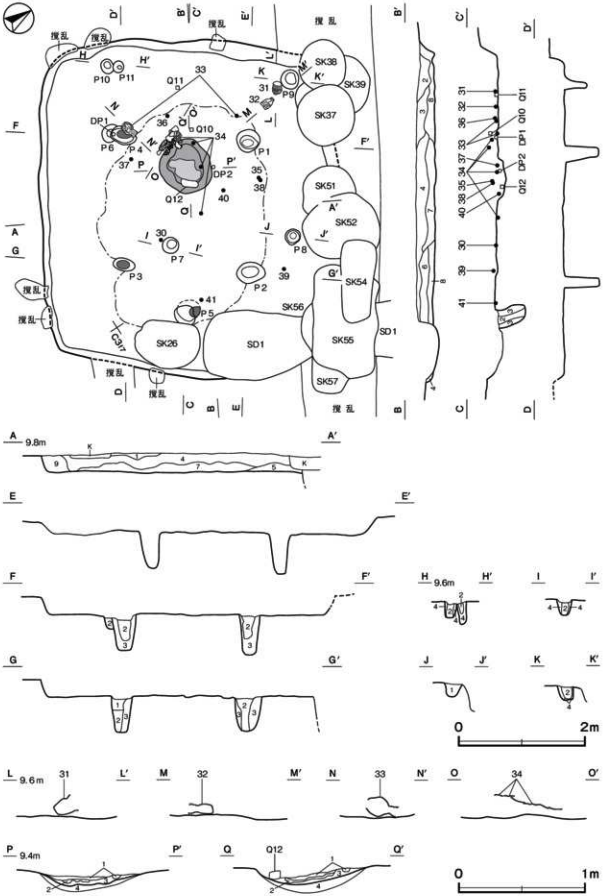
覆土　９層に分層できる。ロームブロックが含まれた層が不規則に堆積していることから，埋め戻されている。

土層解説

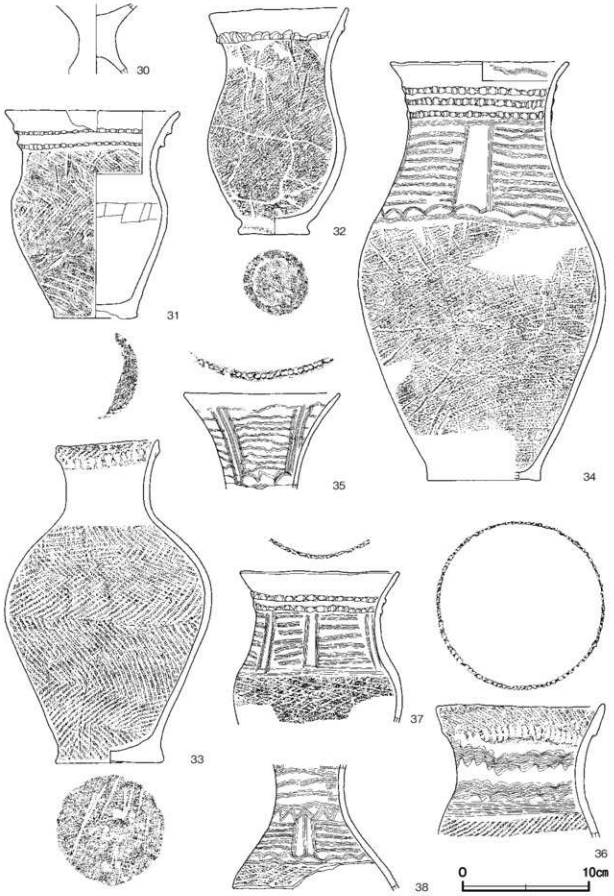
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック微量
6　暗　褐　色　ロームブロック中量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
9　暗　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　弥生土器片218点（高坏２，広口壺215，皿状土器１），土製品２点（紡錘車），石器12点（敲石９，台石１，炉石２），剥片２点，自然礫４点が出土している。31・32は，北隅の床面から横位で出土している。33は完形で，胴部と底部が175cmほど離れた床面から出土している。34は，北西側から南東側にむかって破片が投棄されたような出土状況を示している。DP １はＰ４付近の床面から，DP ２は炉の付近の床面から出土している。

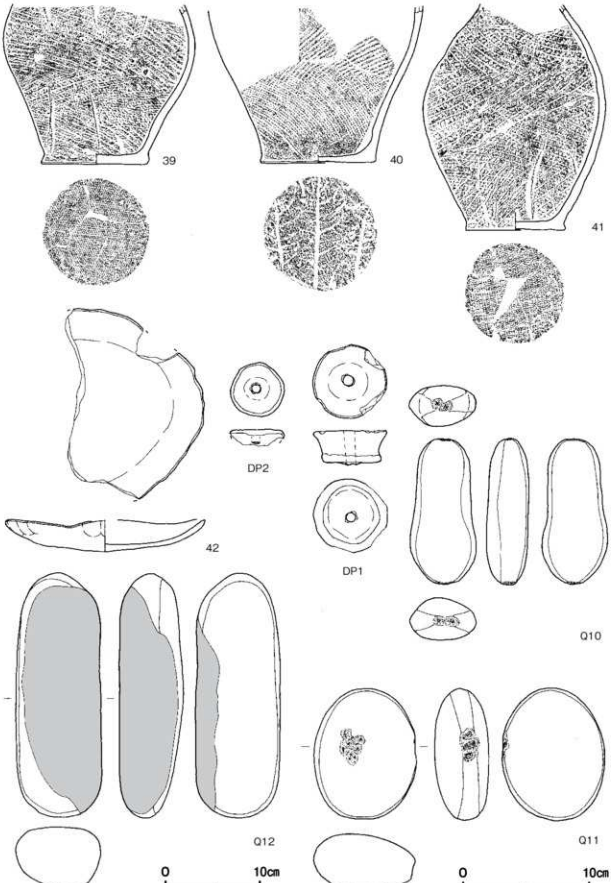
所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第13図　第4号竪穴建物跡実測図



第14図　第4号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第15図　第4号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
30	弥生土器	高坏	－	(5.5)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部縦方向のナデ	床面	65% PL. 7
31	弥生土器	広口壺	13.7	16.4	[66]	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部棒状工具による押圧　口縁部棒状工具による押圧のある隆帯２条　胴部附加条一種（附加１条）縄文による羽状構成　内面ヘラ削り痕　底部目痕	床面	90% PL. 6
32	弥生土器	広口壺	10.8	17.9	5.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部棒状工具による押圧のある隆帯１条　胴部附加条二種（附加２条）縄文施文	床面	90% PL. 6
33	弥生土器	広口壺	8.1	25.6	8.6	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部と胴部附加条一種（附加２条）縄文・原体押圧のある隆帯１条　胴部附加条一種（附加２条）縄文による羽状構成　底部太葉痕	床面	100% PL. 5
34	弥生土器	広口壺	14.1	33.1	[9.0]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部棒状工具による押圧　口縁部押圧のある隆帯３条，内面に一部横歯状工具（４本）による縦文状文　胴部横歯状工具状工具（４本）による縦区画・波状文　胴部附加条二種（附加１条）縄文　底部有目痕	覆土下層～床面	70% PL. 5
35	弥生土器	広口壺	[12.2]	(7.6)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部刺み目　胴部横歯状工具状工具による縦区画（４本）・波状文（３本）	覆土中層	20% PL. 5
36	弥生土器	広口壺	13.3	(10.6)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部刺み目　口縁部附加条一種（附加２条）縄文・下端に原体押圧　胴部横歯状工具（10本）による波状文	覆土下層	50% PL. 5
37	弥生土器	広口壺	12.5	(12.0)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部原体押圧　口縁部押圧のある隆帯２条　胴部横歯状工具（５本）による縦区画・波状文　胴部附加条二種（附加１条）縄文	覆土下層	50% PL. 5
38	弥生土器	広口壺	－	(9.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部横歯状工具（４本）による縦区画・波状文	覆土中層	20% PL. 5
39	弥生土器	広口壺	－	(12.6)	8.4	長石	にぶい黄橙	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文による羽状構成　底部布目痕	覆土下層	50%
40	弥生土器	広口壺	－	(12.2)	9.2	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文，下端ナデ調整　底部木葉痕	床面	30%
41	弥生土器	広口壺	－	(17.9)	7.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部横歯状工具状工具（２本）による縦区画・波状文による充填　横走ヘラ　胴部附加条二種（附加１条）縄文による羽状構成　底部有目痕	床面	60%
42	弥生土器	鉢状土器	[15.8]	2.5	－	長石・石英	にぶい褐	普通	平面円形　外・内面ナデ調整　口縁部外面指頭圧痕	覆土中	50% PL. 7

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	紡錘車	5.9	2.8	0.8	(71.7)	長石・石英	にぶい黄橙	欠損部あり　一方向からの穿孔　ナデ	床面	PL. 7
DP 2	紡錘車	4.3	(1.4)	0.7	(15.5)	長石・石英	にぶい黄橙	欠損部あり　一方向からの穿孔　ナデ	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 10	敲石	11.5	5.3	3.4	291.1	安山岩	両端部に敲打痕を有する	覆土下層	
Q 11	敲石	10.5	8.2	4.4	547.2	砂岩	片面と片側縁部に痕跡状の敲打痕を有する	床面	PL. 8
Q 12	炉石	25.8	9.0	6.8	2,710	安山岩	火熱を受けた痕跡を有する	炉床面	PL. 8

第５号竪穴建物跡（第16図）

位置　調査区東部のＣ３g7区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

規模と形状　南部が調査区域外へ延びているため，東西軸は520ｍで，南北軸は290ｍしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推測でき，推定主軸方向はＮ－63゜－Ｗである。壁は高さ16～20cmで，直立している。

床　平坦で，南部が踏み固められている。

炉　長径66cm，短径55cmの楕円形で，深さ10cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられており，炉床面から約５cm上面から安山岩が出土しているが，明確な火熱痕は見られない。第３層上面が炉床面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

ピット　３か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ32・38cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ３は深さ42cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第１～３は柱痕跡，第４～６に埋土である。

ピット土層解説

1　暗褐色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子少量
4　暗褐色　ロームブロック中量
5　暗褐色　ローム粒子中量
6　褐　色　ロームブロック少量

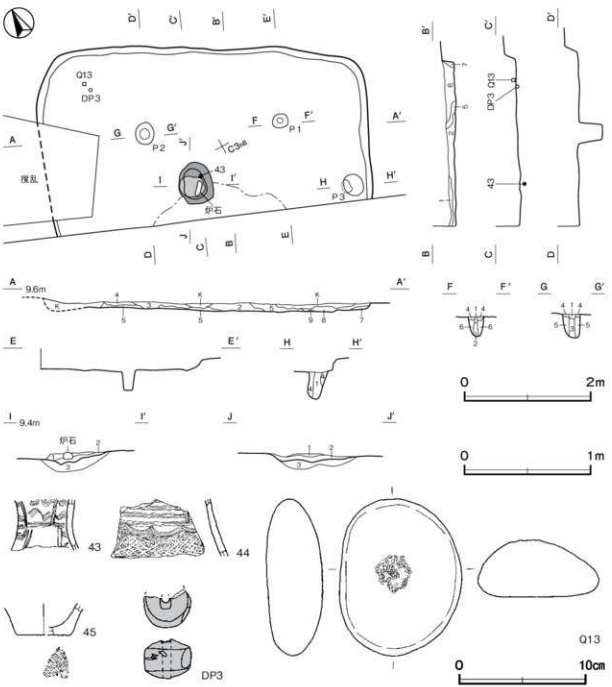
覆土　9層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　ロームブロック少量
7　褐　　色　ロームブロック中量
8　黒　褐　色　ローム粒子少量
9　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量

遺物出土状況　弥生土器片 39 点（広口壺），土製品 1 点（土玉），石器 1 点（敲石），自然礫 10 点が出土している。出土遺物は少なく，43 は炉の覆土下層から，DP 3 は北コーナー部の床面からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第 16 図　第 5 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第５号竪穴建物跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
43	弥生土器	広口壺	－	(4.1)	－	長石・石英	浅黄橙	普通	頸部櫛歯状工具（４本）による縦区画・波状文 赤彩	炉覆土下層	10%
44	弥生土器	広口壺	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	頸部櫛歯状工具状（４本）による縦区画・波状文・連弧文 胴部附加条二種（附加１条）縄文施文	覆土中	5%
45	弥生土器	広口壺	－	(2.5)	(4.2)	長石・石英	にぶい橙	普通	底部布目痕	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	土玉	(3.7)	3.1	0.6	(29.34)	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐	欠損部あり　一方向からの穿孔　ナデ　外面赤彩	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	敲石	12.5	9.8	4.4	779.9	砂岩	痕状の敲打痕を有する	床面	

第６号竪穴建物跡（第17図）

位置　調査区東部のＣ３h9区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　北東壁を第７号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状　南部が調査区域外へ延びているため，確認できたのは北西・南東軸3.64ｍ，北東・南西軸1.65ｍである。方形もしくは長方形と推測でき，長軸方向はＮ－45°－Ｗである。壁は高さ７～15cmで，ほぼ直立している。

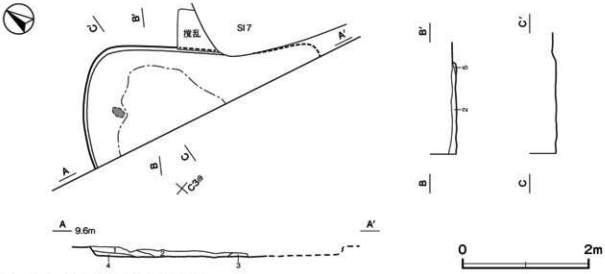
床　平坦で，北側が踏み固められている。北隅に焼土塊が確認でき，調査区域外に炉が存在している可能性がある。

覆土　５層に分層できる。周囲の土砂が流入した堆積を示していることから，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　炭化物・ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　弥生土器片１点（広口壺），自然礫２点が出土している。遺物は細片であるため，図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第17図　第６号竪穴建物跡実測図

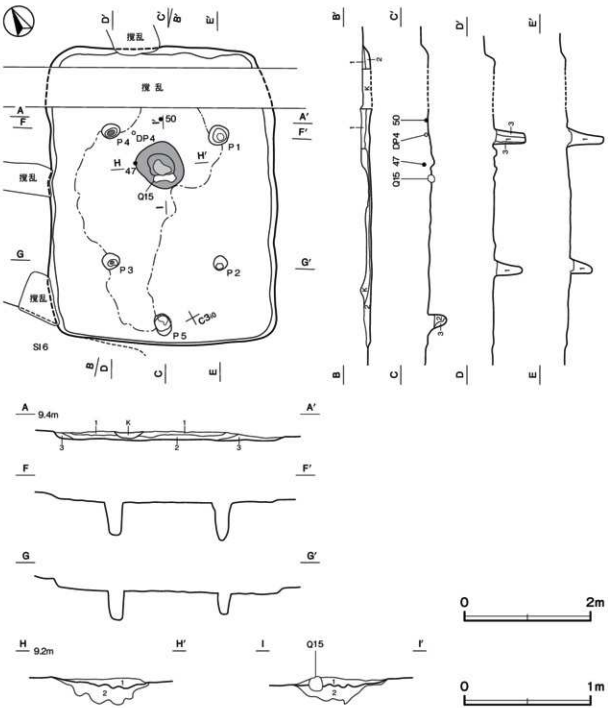
第７号竪穴建物跡（第 18 ～ 20 図　PL3）

位置　調査区東部のＣ３h0 区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　第６号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸 4.70 ｍ，短軸 3.60 ｍの長方形で，主軸方向はＮ－ 27゜－Ｅである。壁は高さ２～ 17㎝で，ほぼ直立している。

床　平坦で，中央部から南西部が踏み固められている。



第 18 図　第７号竪穴建物跡実測図

炉　やや北寄りに付設されている。長径73cm，短径65cmの楕円形で，深さ７cmの地床炉である。炉床を掘りくぼめ，石を据えている。第２層上面が炉床面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック中量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ34～58cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ３･Ｐ４では底面から，柱当たりが確認できた。Ｐ５は深さ29cmで，規模と配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第１・２層は柱痕跡，第３層は埋土である。

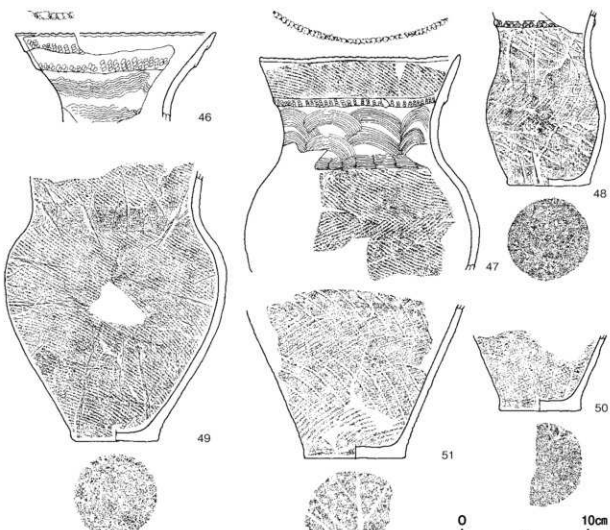
ピット土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック中量

覆土　３層に分層できる。周囲の土砂が流入した堆積を示していることから，自然堆積である。

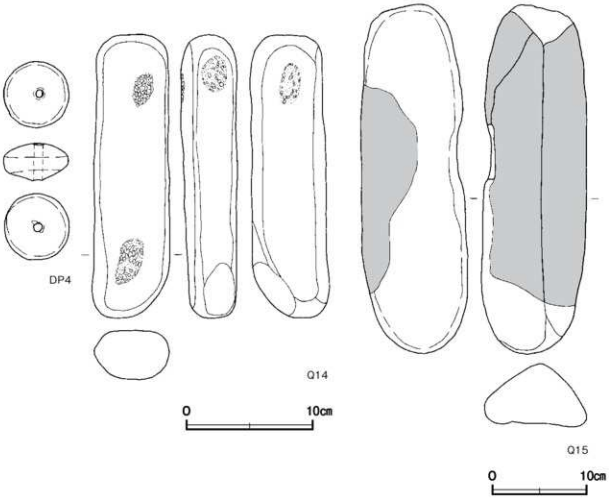
土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　弥生土器片27点（広口壺），土製品１点（紡錘車），石器４点（敲石３，炉石１）が，炉周辺を中心に出土している。47は炉の覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第19図　第７号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 20 図　第 7 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 7 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 19・20 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
46	弥生土器	広口壺	[15.8]	(7.0)	－	長石・石英	灰褐	普通	口頸部原体による押圧　2段の縄方向縄下端原体押圧　頭部微炭化工具（9本）による波状文	覆土中	20%
47	弥生土器	広口壺	[15.8]	(17.1)	－	長石・石英	灰褐	普通	口頸部原体による押圧　口縁部附加条一種（附加2条）縄文・下端原体押圧　頭部微炭化工具（10本）による垂弧文・櫛状文　胴部附加条一種（附加2条）縄文による羽状構成	炉覆土上層	30%　PL 6
48	弥生土器	広口壺	－	(13.9)	6.6	長石・石英	にぶい褐	普通	口頸部棒状工具による押圧のある隆帯1条　胴部附加条一種（附加1条）縄文を羽状構成で施文	覆土中	80%　PL 6
49	弥生土器	広口壺	－	(21.4)	6.5	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	頸部上位附加条一種（附加2条）縄文を施文　下位1段約2 cmの無文帯　胴部附加条一種（附加2条）縄文施文　底部作目痕	覆土中	60%　PL 6
50	弥生土器	広口壺	－	(6.0)	6.5	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文	床面	20%
51	弥生土器	広口壺	－	(12.2)	[8.0]	長石・石英	明赤褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）と附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文　底部本葉痕	覆土中	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	結錘車	5.3	2.9	0.7	72.82	長石・石英	にぶい橙	一方向からの穿孔　ナデ	床面	PL 7

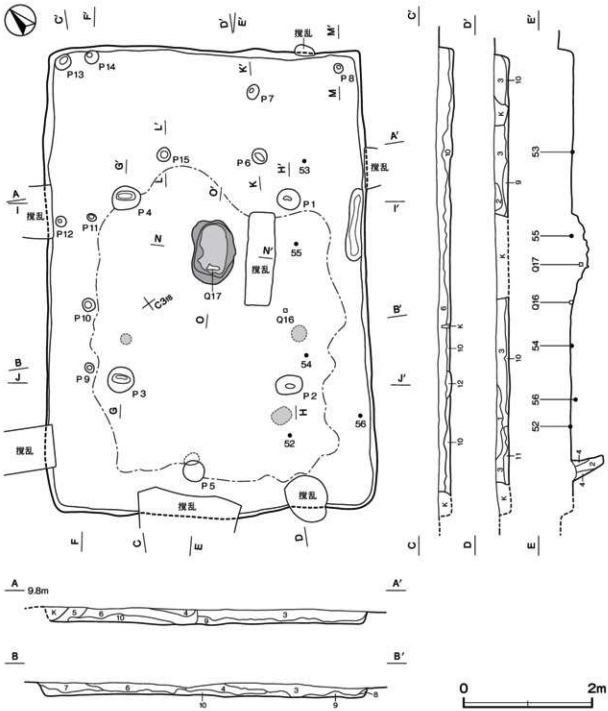
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	敲石	22.5	5.3	4.5	1,060	安山岩	両面・片側側縁部に敲打痕を有する	覆土中	
Q 15	炉石	36.8	11.1	11.4	4,510	安山岩	火熱を受けた痕を有する	炉床面	PL 8

第８号竪穴建物跡（第21～23図　PL４）

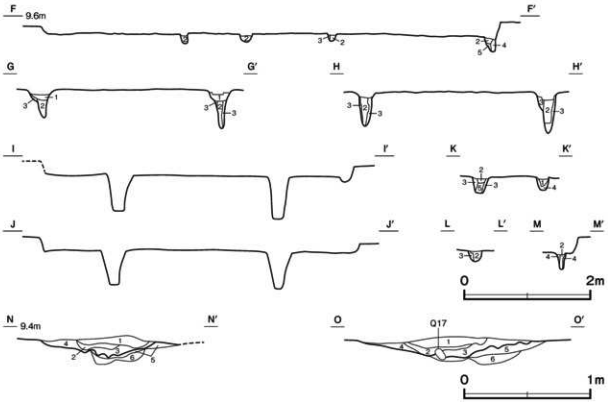
位置　調査区中央部のＣ３e8区，標高９ｍほどの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸7.22ｍ，短軸5.06ｍの長方形で，主軸方向はＮ－39°－Ｅである。壁は高さ12～25cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，中央部から南部にかけて踏み固められている。また，直径18～30cm，厚さ２cmほどの円形の焼土塊が３か所に散っている。



第21図　第８号竪穴建物跡実測図（1）



第22図　第８号竪穴建物跡実測図(2)

炉　中央部に付設されている。長径100cm，短径64cmで深さ15cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ，石が据えられている。炉床面は第５層上面で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック中量

ピット　15か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ54～68cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ50cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６～Ｐ15は深さ10～24cmで，規模と配置から補助柱穴と考えられる。第１・２・５層は柱痕跡，第３・４層は埋土である。

ピット土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子少量

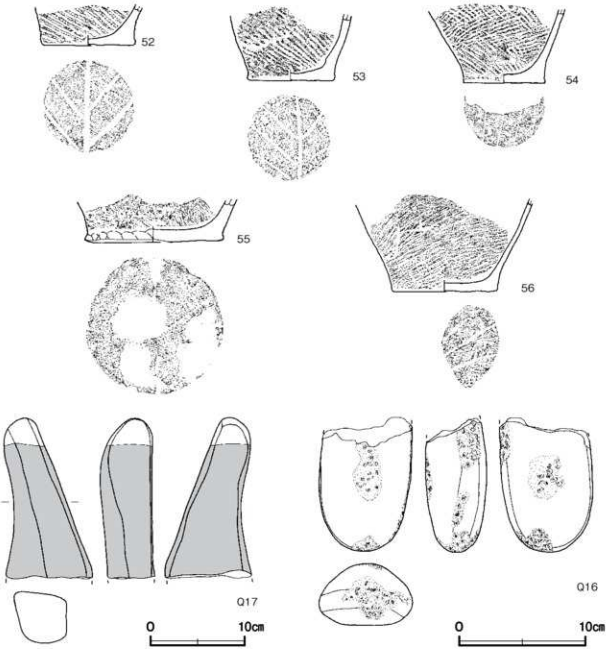
覆土　12層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　にぶい褐色　ローム粒子少量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量
10　極暗褐色　ロームブロック少量
11　暗　褐　色　ロームブロック微量
12　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　弥生土器片133点（広口壺），石器６点（敲石５，炉石１），自然礫11点が出土している。東部から南部の壁寄りに多くの遺物が出土しており，特に底部が目立っている。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。



第 23 図　第８号竪穴建物跡出土遺物実測図

第８号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 23 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
52	弥生土器	広口壺	－	(3.3)	7.2	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文　底部木葉痕	床面	20%
53	弥生土器	広口壺	－	(5.3)	6.8	長石・石英	明赤褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文　底部木葉痕	床面	20%
54	弥生土器	広口壺	－	(5.8)	6.5	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文による羽状構成　底部木葉痕	床面	20%
55	弥生土器	広口壺	－	(3.3)	11.0	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文・下端に指頭圧痕　底部木葉痕・削り痕	床面	10%
56	弥生土器	広口壺	－	(7.3)	[8.4]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部附加条二種（附加１条）縄文　底部木葉痕	床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	敲石	(10.6)	7.5	4.9	(540.5)	砂岩	両面・片側側縁部に敲打痕を有する	床面	
Q 17	炉石	(16.9)	(9.2)	(5.7)	(1,020)	砂岩	火熱を受けた痕跡を有する	炉床面	

表2　弥生時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸（m）	壁高（cm）	床面	炉溝	内部施設 主柱穴	出入口	ピット	炉	貯蔵穴	覆土	主な出土遺物	時期	備考
1	C 2 a6	N－66°－W	方形・長方形	(5.42 × 2.50)	42 ～ 45	平坦	－	2	1	1	－	－	人為	弥生土器，敲石	後期後半	本跡→SK 1・2・29
2	C 3 c1	N－57°－W	長方形	5.41 × 4.45	30 ～ 40	平坦	－	3	2	－	1	－	自然 人為	弥生土器，石鏃，敲石	後期後半	SK10→本跡
3	C 3 d3	N－28°－E	長方形	3.94 × 3.56	30 ～ 34	平坦	－	4	1	－	1	－	自然	弥生土器，敲石	後期後半	本跡→SK 3
4	C 3 e6	N－57°－W	[長方形]	5.36 × [4.70]	20 ～ 28	平坦	－	4	1	6	1	－	人為	弥生土器，砥錆率，敲石	後期後半	本跡→SD 1 SK26・37 ～ 39・51・52・54 ～ 57
5	C 3 g7	N－63°－W	方形・長方形	5.20 × (2.90)	16 ～ 20	平坦	－	2	1	－	1	－	人為	弥生土器，土玉，敲石	後期後半	
6	C 3 h9	N－45°－W	方形・長方形	[3.64] × (1.65)	7 ～ 15	平坦	－	－	－	－	－	－	自然	弥生土器	後期後半	本跡→SI 7
7	C 3 h0	N－27°－E	長方形	4.70 × 3.60	2 ～ 17	平坦	－	4	1	－	1	－	自然	弥生土器，砥錆率，敲石	後期後半	SI 6→本跡
8	C 3 e8	N－39°－E	長方形	7.22 × 5.06	12 ～ 25	平坦	－	4	1	10	1	－	人為	弥生土器，敲石	後期後半	

(2)　土坑

第27号土坑　（第24・25図　PL 4）

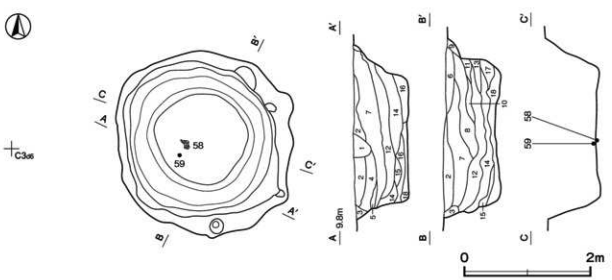
位置　調査区中央部のC 3 e6区，標高9 mほどの平坦部に位置している。

規模と形状　長径3.15 m，短径2.92 mのほぼ円形である。底面までの深さは80cmである。底面は，中央部にやや高まりのある平坦面があり，壁際が一段低くなっている。壁は外傾している。

覆土　18層に分層できる。黒褐色土層が主体で，ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子などが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム ブロック少量
4　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子微量
6　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
7　極 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
8　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物微量
10　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
11　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物微量
12　黒　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子微量
13　暗　褐　色　ローム粒子少量
14　黒　褐　色　ローム ブロック中量
15　暗　褐　色　ローム ブロック中量
16　暗　褐　色　ローム粒子中量
17　黒　褐　色　ローム ブロック・炭化粒子微量
18　褐　　色　ローム ブロック中量



第24図　第27号土坑実測図

遺物出土状況　弥生土器片79点（広口壺），自然礫2点のほか，土師質土器片2点（鍋）が出土している。58は中央付近の底面から横位で，59は覆土下層から正位で出土している。破片の多くが覆土中層から下層にかけて出土しており，埋め戻す過程で混入したと考えられる。

所見　時期は，出土土器から後期後半に比定できる。

第25図　第27号土坑出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
57	弥生土器	広口壺	－	(33.3)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部刻み目　口縁部棒状工具による押圧のある段帯1条	覆土中	5％
58	弥生土器	広口壺	－	(11.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部上位附加条一種（附加2条）縄文施文櫛状工具（9本）による斜文・横走文　胴部附加条1種（附加2条）縄文による沼状構成	底面	20％　PL 5
59	弥生土器	広口壺	－	(4.3)	[8.6]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文施文	覆土下層	5％

2　室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，井戸跡1基が確認された。以下，遺構及び遺物について記述する。

井戸跡

第1号井戸跡　（第26図　PL 4）

位置　平成26年度調査区の南部G 8 b7区，標高6 mほどの平坦部に位置している。

重複関係　上部には，塚の盛土がされていたと考えられるが，撹乱によって壊されている。

規模と形状　東部から南部が調査区域外へ広がっているため，長径1.85 m，短径1.80 mしか確認できなかった。円形もしくは楕円形と推測され，北壁の下部は内彎している。確認面から深さ190cmほど掘り下げた段階で，崩落が想定されたため，以下の調査を断念した。

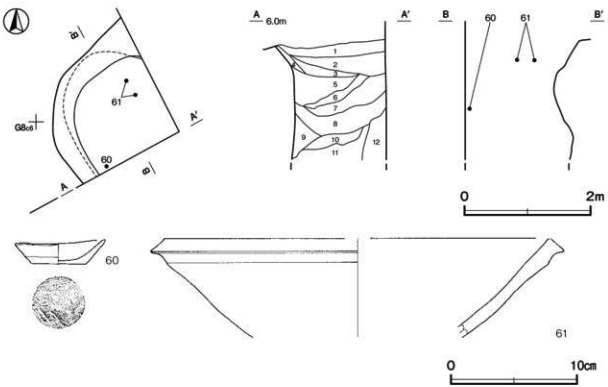
覆土　12層に分層できる。第8～12層は，粘土ブロックや砂礫を含む壁面の崩落土で，第1～7層は埋土である。

土層解説

1　暗　褐　色　中礫・細礫少量，ロームブロック・粘土ブロック微量
2　灰　褐　色　細礫・砂粒多量，中礫中量，ローム粒子少量，粘土ブロック微量
3　にぶい褐色　粘土ブロック中量，細礫・ローム粒子微量
4　黒　褐　色　粘土ブロック・細礫少量，ロームブロック微量
5　黒　　色　粘土粒子中量，中礫・砂粒少量，ロームブロック微量
6　にぶい橙色　細礫・砂粒中量，中礫・粘土粒子少量
7　灰 黄 褐 色　細礫中量，中礫・粘土粒子少量，ロームブロック・砂粒微量
8　極 暗 褐 色　細礫・砂粒少量，中礫微量
9　極 暗 褐 色　粘土ブロック中量，砂粒・粘土粒子少量
10　極 暗 褐 色　細礫少量，砂粒微量
11　暗　褐　色　細礫中量，砂粒少量，中礫微量
12　明 褐 灰 色　粘土粒子・砂粒多量

遺物出土状況　土師質土器１点（小皿），須恵器片１点（甕），陶器片２点（鉢）のほか，埴輪片 32 点（形象埴輪２，円筒埴輪 30）が出土している。60 は覆土中層から，61 は覆土上層からそれぞれ出土している。覆土中から埴輪片が多量に出土しているが，埋め戻した際に混入したものと考えられる。なお，出土した埴輪片については，次章の行人塚古墳に掲載する。

所見　時期は，出土土器から 15 世紀後半に比定できる。



第 26 図　第１号井戸跡・出土遺物実測図

第１号井戸跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
60	土師質土器	小皿	7.1	2.0	4.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ　底部回転糸切り後ヘラ削り	覆土中層	95%　PL 7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
61	陶器	鉢	[30.6]	(7.8)	－	長石・石英・雲母　外面灰赤褐色	外・内面ナデ	鉄釉	常滑	覆土上層	5%

3　その他の遺構と遺物

今回の調査で，時期や性格が明確でない土坑 65 基と溝跡２条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　土坑

土坑 65 基については，遺構全体図（第４図）と一覧表で掲載する。

表3　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径（軸）方向	平面形	規模 長径（軸）×短径（軸）(m)	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
1	C 2b0	N－4°－E	楕円形	0.58 × 0.52	50	ほぼ直立 外傾	皿状	人為		SI 1→本跡
2	C 2b0	－	円形	0.46 × 0.42	34	外傾	皿状	人為		SI 1→本跡
3	C 3c3	N－47°－W	楕円形	1.36 × 0.67	15	緩斜	平坦	自然		SI 3→本跡
4	C 2b0	N－11°－W	楕円形	0.36 × 0.31	65	ほぼ直立	平坦	人為	弥生土器	
5	C 2b0	N－68°－E	隅丸長方形	0.47 × 0.32	44	ほぼ直立	平坦	人為		
6	C 2b0	N－34°－W	楕円形	0.48 × 0.38	48	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	弥生土器	
7	C 2b9	N－65°－E	楕円形	0.59 × 0.37	80	ほぼ直立	平坦	人為	弥生土器	
8	C 3b3	N－28°－E	楕円形	0.84 × 0.70	16	ほぼ直立	平坦	自然		
9	C 3b3	N－60°－W	隅丸長方形	0.98 × 0.78	12	外傾	平坦	自然		
10	C 3c0	－	［円形］	0.64 × (0.42)	16	直立	平坦	自然		本跡→SI 2
12	C 3c6	N－3°－E	楕円形	0.92 × 0.76	20	ほぼ直立	平坦	人為		
12	C 3d7	N－30°－E	［楕円形］	0.78 × (0.64)	12	外傾	平坦	人為		
13	C 3e6	N－19°－W	楕円形	0.80 × 0.70	18	外傾 緩斜	平坦	自然		
14	C 3d5	N－57°－W	［隅丸長方形］	(2.00) × 1.24	62	直立	平坦	人為		本跡→SK63
15	C 3e9	N－66°－E	楕円形	0.77 × 0.62	26	外傾	平坦	人為		本跡→SK16
16	C 3e9	N－64°－E	楕円形	0.68 × 0.53	18	外傾 緩斜	平坦	人為		SK15→本跡
17	C 3d5	－	円形	0.36 × 0.35	30	直立 外傾	皿状	自然		
18	C 3d5	－	円形	0.61 × 0.56	16	緩斜	皿状	自然		
19	C 3d5	－	円形	0.40 × 0.39	32	外傾	皿状	自然		
20	C 3d5	N－48°－W	楕円形	0.52 × 0.41	29	外傾	皿状	自然		
21	C 3e4	N－83°－E	楕円形	0.74 × 0.52	20	外傾	皿状	自然		
22	C 3e4	N－16°－W	楕円形	0.47 × 0.40	30	外傾	皿状	自然		
23	C 3e5	－	円形	0.46 × 0.43	50	ほぼ直立	皿状	自然		
24	C 3e3	N－22°－E	楕円形	0.72 × 0.43	18	ほぼ直立	平坦	自然		
25	C 3f4	N－39°－E	楕円形	0.60 × 0.50	14～21	外傾	有段	自然	弥生土器	
26	C 3e7	N－35°－E	楕円形	1.04 × 0.76	12	緩斜	平坦	自然		SI 4→本跡
28	C 3c6	－	円形	0.33 × 0.32	50	ほぼ直立	皿状	人為	弥生土器	
29	C 2b0	N－84°－W	楕円形	0.31 × 0.28	77	直立	平坦	人為	弥生土器，礫	SI 1→本跡
30	C 3c2	－	円形	0.45 × 0.43	23～36	直立	有段	自然		
31	C 3c2	N－83°－E	楕円形	0.60 × 0.52	22	ほぼ直立	平坦	自然		
32	C 3c2	N－5°－E	楕円形	1.40 × 0.73	24	緩斜	平坦	自然		
33	C 3d2	N－10°－W	楕円形	0.48 × 0.42	25	外傾	平坦	自然		
34	C 3c2	－	円形	0.41 × 0.40	28	ほぼ直立	平坦	自然		
35	C 3c2	N－17°－W	楕円形	0.48 × 0.42	34	ほぼ直立	有段	自然		
36	C 3d2	N－36°－E	楕円形	1.40 × 0.70	31	外傾	平坦	自然		
37	C 3d6	－	円形	0.94 × 0.94	16	緩斜	平坦	人為		SI 4→SK39→SK38→本跡
38	C 3d6	－	円形	0.76 × 0.76	36	ほぼ直立	平坦	人為	弥生土器	SI 4→SK39→本跡→SK37
39	C 3d6	N－10°－E	楕円形	1.24 × 0.94	60	直立	有段	人為	弥生土器	SI 4→本跡→SK38→SK37
40	C 3b1	N－89°－W	楕円形	0.71 × 0.53	34	外傾	平坦	人為		
41	C 3b1	－	円形	0.72 × 0.68	15	緩斜	皿状	自然	弥生土器	
42	C 3e2	N－55°－E	楕円形	0.74 × 0.60	28	直立 外傾	平坦	人為		
43	C 3e9	－	円形	0.60 × 0.57	18	ほぼ直立	平坦	人為		
44	C 3e4	－	円形	0.76 × 0.73	16	緩斜	平坦	人為		
45	C 3d3	N－52°－W	不定形	0.84 × 0.50	20	外傾	平坦	人為		
46	C 3e4	N－61°－E	楕円形	1.12 × 0.90	20	外傾	平坦	自然		
47	C 4b3	N－47°－E	隅丸長方形	0.98 × 0.78	34	ほぼ直立	平坦	自然		

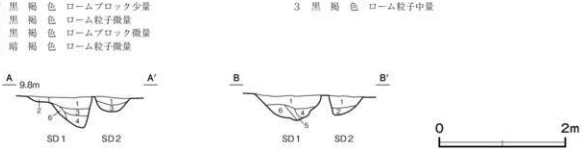
番号	位置	長径（軸）方向	平面形	規模 長径（軸）×短径（軸）(m)	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
48	C 3 b1	N－51°－E	不定形	1.40 × 1.36	30	外傾	凹凸	自然		
49	C 3 d6	N－1°－E	楕円形	1.04 × 0.74	32	ほぼ直立	平坦	自然		
50	C 3 d6	－	［円形］	(1.00) × 0.96	60	直立	平坦	人為		本跡→SK60
51	C 3 e7	－	［円形・楕円形］	0.86 × (0.50)	36	ほぼ直立	平坦	人為		SI 4→本跡→SK52
52	C 3 e7	N－15°－E	［楕円形］	1.18 × (0.80)	46	ほぼ直立	平坦	人為		SI 4→SK51→本跡→SK54
54	C 3 e7	N－55°－W	長方形	1.30 × 0.60	80	直立	平坦	人為		SI 4→SD1→SK52・55→本跡
55	C 3 e7	N－55°－W	隅丸長方形	1.66 × 1.06	80	ほぼ直立	平坦	人為		SI 4→SD 1・2→SK56・57→本跡→SK54
56	C 3 e7	－	－	(0.74 × 0.18)	18	直立	平坦	人為		SI 4→SD1→本跡→SK55・57
57	C 3 e7	－	－	0.58 × (0.42)	70	ほぼ直立	平坦	人為		SI 4→SD 1・2→本跡→SK55・56
58	C 3 d7	N－69°－E	楕円形	1.10 × 0.96	74	ほぼ直立	平坦	自然	陶器	
59	C 3 e6	－	－	(0.80 × 0.20)	40	ほぼ直立	平坦	自然		
60	C 3 d6	N－60°－W	長方形	1.30 × 1.10	80	直立	平坦	自然		SK50→本跡
61	C 3 d5	－	円形	1.04 × 1.00	62	直立	平坦	人為		SK62→本跡
62	C 3 d5	N－60°－E	［方形・長方形］	0.86 × (0.30)	56	直立	平坦	人為		本跡→SK61
63	C 3 d5	N－25°－E	［長方形］	1.34 × (0.90)	40	外傾	平坦	人為		SK14→本跡
64	C 4 b2	N－35°－W	楕円形	1.62 × 1.21	54	緩斜	平坦	人為	陶器	
65	G 8 b6	N－41°－E	［方形・長方形］	(3.35) × 2.20	56	直立	平坦	人為	埴輪	本跡→SK67
66	G 8 b5	－	［円形・楕円形］	(0.60 × 0.28)	46	ほぼ直立	平坦	人為	埴輪	
67	G 8 a6	N－56°－E	［楕円形］	1.45 × (0.67)	142	外傾	平坦	人為	埴輪	SK65→本跡

(2) 溝跡

溝跡２条を確認した。以下，土層解説と実測図（第27図），一覧表を掲載し，平面図については遺構全体図（第４図）に示す。

第１号溝跡土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ロームブロック微量
3 黒 褐 色 ロームブロック少量
4 黒 褐 色 ローム粒子微量
5 黒 褐 色 ロームブロック微量
6 暗 褐 色 ローム粒子微量

第２号溝跡土層解説
1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
2 暗 褐 色 ローム粒子少量
3 黒 褐 色 ローム粒子中量



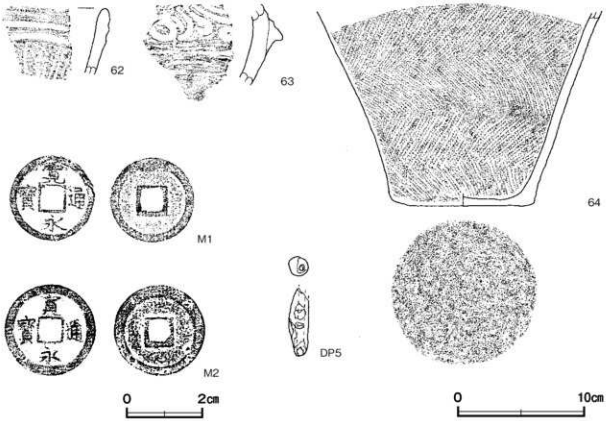
第27図 その他の溝跡実測図

表４ その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模 長さ（m）	規模 上幅（cm）	規模 下幅（cm）	規模 深さ（cm）	断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
1	C 3 d7－C 3 e7	N－34°－E	直線	(6.00)	76～115	12～64	36～48	U字状	外傾	自然	弥生土器	SI 4→本跡→SK54～57
2	C 3 d7－C 3 e7	N－34°－E	直線	(4.75)	48～70	25～42	22～30	U字状	外傾	自然	弥生土器	SI 4→本跡→SK55・57

(3) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については，実測図（第28図）と観察表を掲載する。



第28図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
62	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	2本の平行沈線　単節縄文LR施文（縦）	SI 4	5％
63	縄文土器	浅鉢	－	(6.4)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部外・内面横位のミガキ	表採	5％
64	弥生土器	広口壺	－	(15.4)	11.0	長石・石英・針状物質	にぶい赤褐	普通	胴部太芯の異なる附加条1種（附加2条）縄文を羽状構成で施文　底部砂目痕	表採	50％

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 5	管状土錘	1.5～1.6	(5.4)	0.5	(11.02)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	欠損部あり　一方向からの穿孔　ナデ	表採	PL 7

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	寛永通寶	2.29	0.59	0.13	2.57	1698	銅	新寛永	表採	PL 8
M 2	寛永通寶	2.45	0.56	0.13	2.72	1698	銅	新寛永	表採	PL 8

第4節 ま　と　め

1　はじめに

髭釜遺跡は，大洗町の北東部に位置し，東に太平洋，西に涸沼川を望む低台地上に立地している。大洗町は，県内でも弥生時代後期の集落跡が多く確認されている地域であり，当遺跡も昭和50年代に大洗鹿島線敷設や大洗駅前開発の際に行われた発掘調査により弥生時代後期の大集落跡が確認されている[1]。今回の調査区は遺跡の南東部に位置しており，太平洋側へ向かって傾斜していくことから，集落域の東端にあたると考えられる。

今回の調査で確認した遺構は，平成26年度調査区から室町時代の井戸跡1基，時期不明の土坑3基，平成27年度調査区から弥生時代後期後半の竪穴建物跡8棟，土坑1基，時期不明の土坑62基，溝跡2条である。ここでは，弥生時代後期の竪穴建物跡や出土遺物について若干の考察を加え，まとめとしたい。

2　出土土器の特徴について

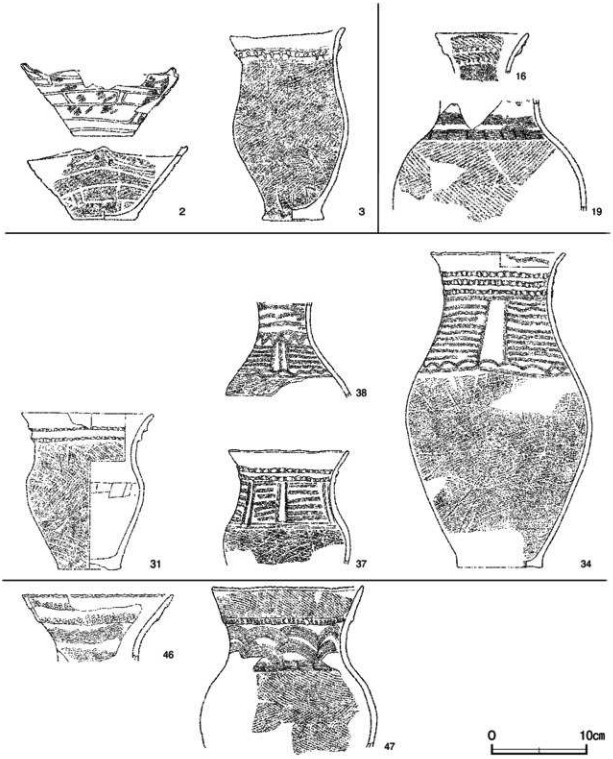
今回の調査では，第1・2・4・7号竪穴建物跡から，弥生時代後期後半に比定できる土器群が出土している。以下，それぞれの竪穴建物跡出土土器の特徴について述べる。（第29図）

2・3は第1号竪穴建物跡から出土した土器群である。2の浅鉢形土器は波状口縁を呈し，口縁部・口唇部に3か所の孔がある。胴部は，単節縄文を斜めに回転させ施文した後，棒状工具によって変形工字文を描いている。これは，弥生時代後期に福島県の中通りから会津地方にかけて分布する天王山式にみられる文様であり，2は天王山系統の土器と考えられる。また，胎土に雲母が多量に含まれていることから，搬入品の可能性がある。天王山式の土器としては既報告の当遺跡の第59号住居や，周辺の一本松遺跡の第53・91号竪穴建物跡からも出土している[2]。3も隆起線の刻み目が深いこと，胴部下位に膨らみがみられ下端部がハの字に広がることなどの特徴から，東北地方の影響を受けたと推測される。

16・19・46・47は類似した特徴がみられる土器群で，第2・7号竪穴建物跡から出土している。頭部に櫛歯の数が多い工具で簾状文・波状文・連弧文を描き，胴部には附加条一種（付加2条）縄文を羽状構成で施文しており，県西部に分布する二軒屋式の特徴がみられる。16は，附加条一種の縄文を複合口縁に施文するという二軒屋式に多い特徴と，頭部を櫛歯状工具により縦区画や波状文を施す十王台式の特徴の融合の見られる土器である。

31・34・37・38は第4号竪穴建物跡から出土している。34・37・38は，頭部に櫛歯状工具（4～5本）で縦の区画をして，波状文・横走文を施している。口縁部は無文で，頭部上位には隆起線貼付後に棒状工具及び指頭で押圧され，胴部にはすべて附加条二種（付加1条）縄文が施文されている。第4号竪穴建物跡から出土した土器からは，櫛歯状工具状による頭部の縦区画や波状文が施されるという十王台式期の特徴をもつものが多くみられた。その他の竪穴建物跡からは，31のような，頭部に工具や指頭による押圧のある隆帯をもち，胴部に附加条縄文を施したものが多数を占めている。これらの土器群を土器編年に照らし合わせると[3]，十王台1式期に該当する土器群である。

以上，それぞれの竪穴建物跡から出土した土器の特徴について述べてきたが，すべて十王台式初期段階にみられる土器群である。在地だけではなく，東北地方の影響をうけたと考えられる特徴のものや，中でも二軒屋式の特徴を持つものが多くみられたことから地域間での交流があったと推測される。



第 29 図　弥生土器集成図

3　竪穴建物跡について

今回確認した竪穴建物跡の形状や炉の特徴について，ふれておきたい。

今回確認した第８号竪穴建物跡は，長軸 7.22 m の長方形を呈しており，他の竪穴建物に比べ大型であった。昭和 55 年の調査報告による第 11 号竪穴建物跡[7] も第８号竪穴建物跡と規模と形状が類似している。弥生時代後期の那珂川流域・久慈川流域の竪穴建物跡は長軸５m前後を標準としており，そのなかでも拠点的な集落からは７m を超える大型の建物跡が確認される例がある[8]。当遺跡周辺でも大型の竪穴建物跡が確認さ

れており，一本松遺跡の第7号竪穴建物跡[5]と長峯遺跡の第9号竪穴建物跡[6]で，それぞれ長軸8.80 mと7.15 mである。両遺跡とも，多くの竪穴建物跡が確認されており，拠点的な集落である。当遺跡における大型の竪穴建物跡に関しても同様の例であると考えられる。

柱穴の形状に関しても類似性のある特徴が見られた。第3・4・8号竪穴建物跡の主柱穴が細長い楕円形を呈しており，この特徴は昭和55年に調査報告されている第1・30・32号竪穴建物跡や，周辺地域の一本松遺跡の第52・58号竪穴建物跡，長峯遺跡の第24・29・47号竪穴建物跡，千天遺跡の第8・11・15・18号竪穴建物跡などでも同様な例が報告されている。こういった主柱穴の形状を呈する竪穴建物跡は弥生時代後期の県内において多数の例が報告されており[8]，柱材として材木を割って加工したものを使用していたと推測される。

竪穴建物跡6棟からは炉跡から炉石を確認した。弥生時代後期において石が据えられる形態の炉は，県北地域から涸沼川周辺地域と恋瀬川・桜川流域にみられ，それぞれ十王台式土器と上稲吉式土器の文化圏中心域である[9]。炉石は，炉の出入り口側に位置し，炉石の長径方向は建物の主軸と直交するように置かれている。同様な例は既に報告されている髭釜遺跡の第1・11・30・32・37・41・43・44号竪穴建物跡[10]にもみられる。当遺跡においても，炉に石が据えられる形態が多数確認される傾向にあることが分かった。石材には，横長で，30cm程度の安山岩・砂岩が用いられており，那珂川流域および海岸などの周辺地域で採集されたものと考えられる。

4　おわりに

以上，髭釜遺跡における今回の調査区で出土した土器などの遺物や竪穴建物跡について特徴を述べ，考察を加えてきた。竪穴建物跡から出土した土器は，東北地方や特に二軒屋式文化圏の特徴を持つ土器が多く確認できたことから，十王台式の初期段階において，当遺跡では地域間での交流が行われていたことが推測される。また，竪穴建物跡の形態についても，類似性のある特徴を確認することができた。

髭釜遺跡は，弥生時代後期の拠点的な集落が数多く確認されている大洗町の中でも，代表的な遺跡の一つである。調査することのできた遺構は少ないが，今回の調査によって髭釜遺跡の遺構や遺物の様相の一端を明らかにすることができた。調査の成果が，今後の弥生時代後期の遺構や遺物，集落の様相などの研究の一助となれば幸いである。

註

1）井上義安編『髭釜　鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会　1980年3月

2）井上義安編著『一本松遺跡』茨城県大洗町一本松埋蔵文化財発掘調査会　2001年3月

3）a 弥生時代研究班「茨城県後期弥生式土器編年の検討（首）」『研究ノート』3号　財団法人茨城県教育財団　1993年7月

b 鈴木素行編『武田石高遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編』『ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第15集　1998年1月

c 海老澤稔他『東日本弥生時代後期の土器編年』　東日本埋蔵文化財研究会　2000年1月

4）鈴木素行「弥生時代後期の北関東」『公開講座『ひたちなか市の考古学』第6回』ひたちなか市埋蔵文化財調査センター　2014年1月

5）註2に同じ

6）大洗町長峯調査団『茨城県大洗町長峯遺跡』『大洗町文化財調査報告書』第4集　1973年12月

7）註1に同じ

8）a 芳賀友博　小野政美『塚本遺跡　足華海北遺跡　谷ツ迫遺跡　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告・一般国道6号千久土浦バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財団文化財調査報告』第310集　2009年3月

b 川井伸也　『加茂吉古墳群　金谷遺跡　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財団文化財調査報告』第304集　2008年3月

c 長岡正雄　中村浩一郎　『総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　仲丸遺跡　久保塚群　五万堀古道　向原遺跡・向原塚群　前原塚　仲丸塚』『茨城県教育財団文化財調査報告』第162集　2000年3月

d 長谷川聡『大作遺跡　大畑遺跡　北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集　1988年3月

9）鴨見貞夫『弥石住居覚書－茨城県の弥生・古墳時代の住居例から－』『研究ノート』5号　茨城県教育財団　1996年8月

10）註1に同じ

第4章　行　人　塚　古　墳

第1節　調　査　の　概　要

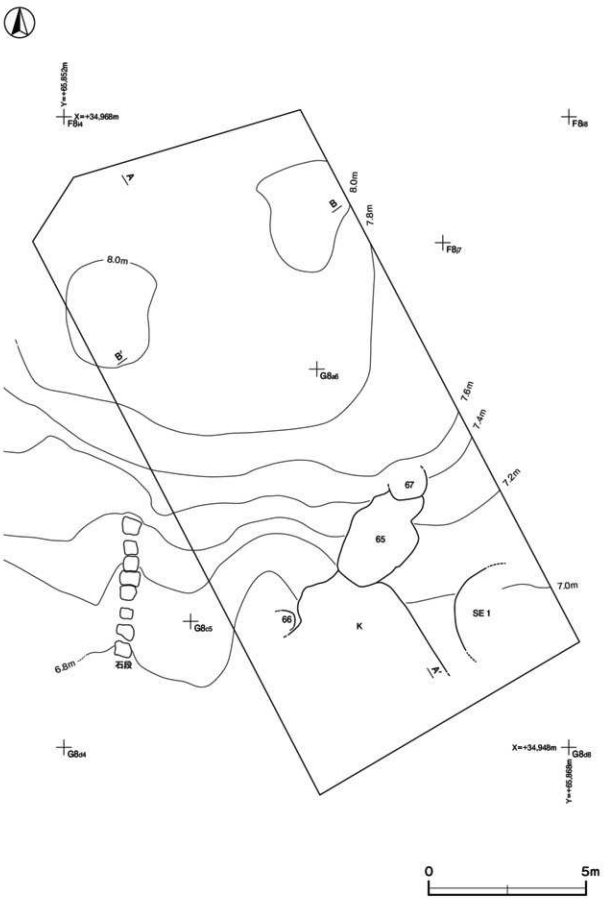
行人塚古墳は，茨城県東茨城群大洗町の北部に位置し，太平洋を望む標高7mの海岸低位段丘上に立地している。調査面積は平成26年度に調査した髭釜遺跡と合わせて190㎡で，調査前の現況は宅地である。また，当古墳は髭釜遺跡内に所在しているため，調査区内で確認された井戸跡と土坑については，平成26年度調査の髭釜遺跡の遺構として前章に掲載している。

後世には，塚として利用されており，近世以降には社が造営されていた。調査区域外には，社造営時の石段などが残っている。後世の土地利用により，今回の調査で埋葬施設及び周溝などを確認することはできなかった。また，墳丘部も近世以降に塚として利用されたり，社が造営されたため，大きく削平されてしまっている。墳形としては，円墳と推測できる。

遺物は，収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は，瓦質土器（灯籠），陶器（乗燭），埴輪（形象埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪）などである。

第2節　基　本　層　序

基本層序については，調査区が平成26年度調査の髭釜遺跡と同じであるため，前章の髭釜遺跡平成26年度調査の基本層序の土層解説と基本土層図（第3図）を参照とする。



第 30 図　行人塚古墳全体図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，古墳1基を確認した。古墳の上部には，近世以降に作られた塚も確認されたため，遺構及び遺物について併せて記述する。

古墳

第1号墳（第30・31図 **PL9**）

位置 調査区中央，標高7mの平坦部に位置している。

重複関係 髭釜遺跡の第65・67号土坑に掘り込まれており，上部に塚が構築されている。

規模と形状 後世の改変や塚を構築する際などに墳丘部が削平されており，東西径9.32 m，南北径6.82 m，高さ0.95 mしか確認できなかった。主体部及び，周溝も，確認できなかった。墳丘から周溝にかけて後世の削平を受けており，墳端が不明であるため，正確な墳径などは分からない。墳形は円墳と推測できる。

構築状況 古墳及び塚の構築土は，16層に分層できる。上部第1～9層は，近世以降の塚及び社造営の際に盛られた土であり，その際の基礎と考えられる石が出土している。第8・9層は，塚あるいは社の柱の抜き取り後の堆積土と考えられる。第10～16層が墳丘の盛土の残存である。第17層～19層は旧表土で，第10・13・14層の黒色土ブロックは，旧表土である第17層の黒色土に由来するものである。また，第16層の土は，第19層の下に堆積している明黄褐色で粘性のある土を含んでいる。墳丘の構築方法としては，まず，旧表土である第17層の上面を平らに整えたのち，旧表土下のローム土を主体とする第16層を中央部は薄く，周囲はやや高く盛って，基部としている。さらに，第10・12・14層のローム土が主体の層と，第11・13・15層の黒色土が主体の層を，小規模な単位ごと交互に盛って構築している。

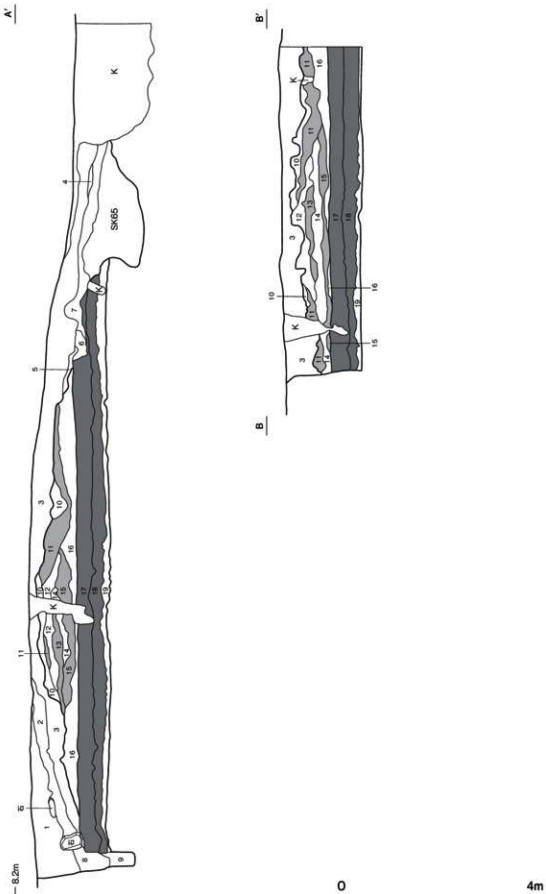
なお，第17～19層は，平成26年度髭釜遺跡の基本層序第1～3層に対応する。

土層解説

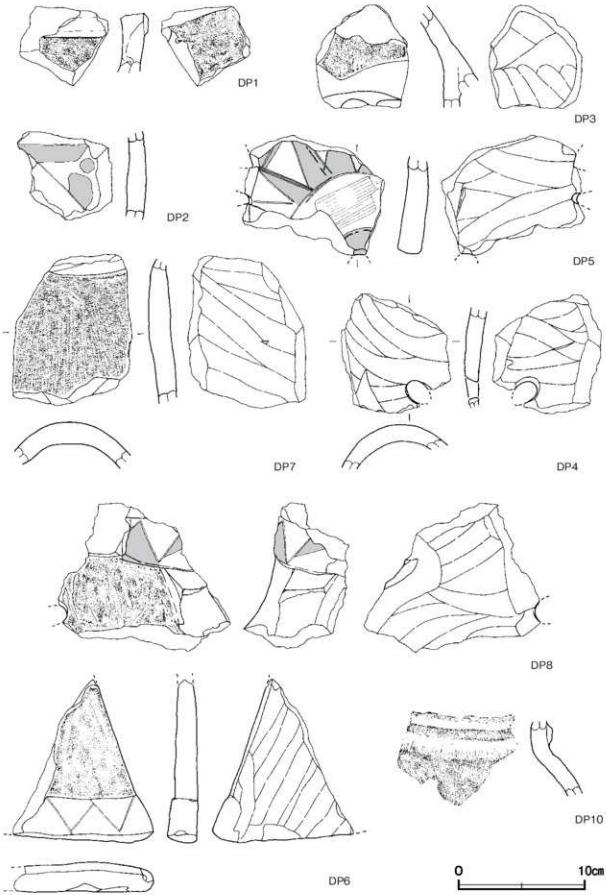
1	黒褐色	小・中礫多量	
2	暗褐色	ローム粒子中量，黒色土ブロック微量	
3	褐色	粘土粒子少量，ロームブロック微量	
4	褐灰色	砂粒多量	
5	暗褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	
6	褐色	粘土中ブロック多量，黒色土ブロック少量	
7	灰褐色	粘土粒子中量，黒色土ブロック少量，ローム粒子微量	
8	黒色	ローム粒子少量	
9	暗褐色	ローム粒子中量，礫少量	
10	褐色	ロームブロック多量，黒色土ブロック微量	
11	黒色	ロームブロック微量	
12	褐色	ロームブロック中量	
13	黒色	黒色土ブロック多量，ロームブロック少量	
14	褐色	ロームブロック多量，黒色土ブロック少量	
15	黒色	黒色土ブロック多量	
16	にぶい黄橙色	ロームブロック中量，浅黄橙色土ブロック少量	
17	黒色	ローム粒子微量	
18	暗褐色	ローム粒子微量	
19	褐色	ローム粒子少量	

遺物出土状況 埴輪片28点（形象9，朝顔形1，円筒18），瓦質土器3点（羽釜2，灯籠1），陶器3点（鉢1，乗燭1，土瓶1）が出土している。墳丘上面は削平されているため古墳の盛土中からは埴輪片は確認されなかった。そのため，塚構築土中，髭釜遺跡第1号井戸跡，第65・67号土坑から出土している埴輪片については，本古墳に伴うものとして扱うこととする。埴輪片以外の遺物は，塚構築土中から出土及び表採されており，乗燭及び灯籠は遺構外遺物に掲載する。

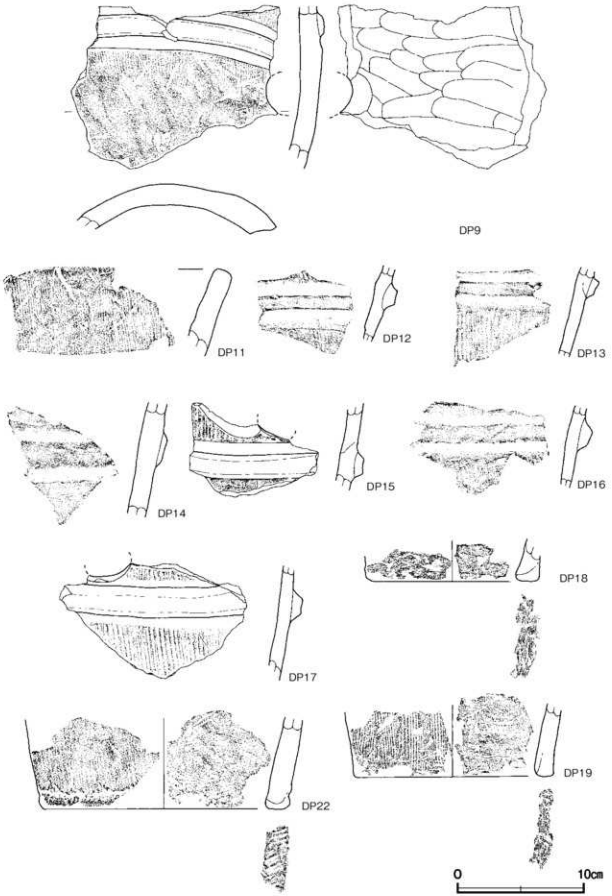
所見 時期は，出土した埴輪から6世紀前半に比定できる。埴輪片以外にも江戸時代の乗燭，灯籠などが出土しており，近世以降は塚として利用されていた痕跡を確認した。



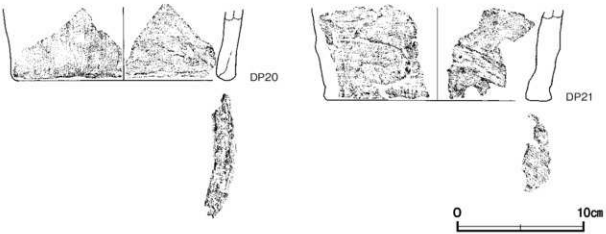
第 31 図　行人塚古墳第 1 号墳断面実測図



第32図　第1号墳出土遺物実測図(1)



第33図　第1号墳出土遺物実測図(2)



第 34 図　第 1 号墳出土遺物実測図 (3)

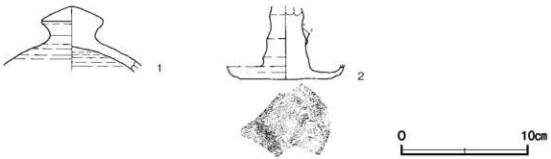
第 1 号墳出土遺物観察表（第 32 ～ 34 図）

番号	器　種	径・幅	器高	厚さ	底径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 1	形象埴輪	(7.1)	(4.7)	1.6 ～ 2.1	－	(74.1)	長石・石英	にぶい橙	内面に透かし孔　外・内面ナデ	墓機埋土	
DP 2	形象埴輪	(7.5)	(7.0)	1.2 ～ 1.5	－	(90.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	外面ナデ　線刻　線刻内赤彩　内面ナデ	掘基道跡 SK65	PL10
DP 3	形象埴輪	(7.3)	(8.1)	1.3 ～ 4.5	－	(149.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	人物のスカートの一部ヵ　外・内面ナデ	墓機埋土	PL10
DP 4	形象埴輪	(8.7)	(9.5)	1.1 ～ 1.3	－	(142.1)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	人物の腕ヵ　外・内面指ナデ	掘基道跡 SE1	PL10
DP 5	形象埴輪	(11.4)	(9.5)	1.5 ～ 2.0	－	(235.1)	長石・石英・赤色粒子	橙	鞍　外面ナデ斜位ハケ　線刻（三角・曲線）内赤彩　内面指ナデ	墓機埋土	PL10
DP 6	形象埴輪	(11.2)	(13.0)	1.3 ～ 2.4	－	(227.8)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	鞍ヵ　外・内面指ナデ　下部に線刻（三角形）のある貼付	掘基道跡 SK65	PL10
DP 7	形象埴輪	(9.4)	(12.0)	1.4 ～ 1.7	－	(274.3)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	人物の腕ヵ　外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SE1	PL10
DP 8	形象埴輪	(13.8)	(11.9)	－	－	(429.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子・木炭	にぶい橙	馬の尻ヵ　外・内面指ナデ　縦位に帯状の貼付　横位に線刻（三角形）のある帯状の貼付　線刻内赤彩	表採	PL10
DP 9	形象埴輪	[23.2]	(13.9)	1.5 ～ 2.9	－	(490.6)	長石・石英・赤色粒子・木炭	橙	外面縦ハケ　下部指ナデ（斜）　内面指ナデ	表採	PL10
DP10	家屋形埴輪	(9.1)	(6.0)	1.2 ～ 1.8	－	(127.3)	長石・石英	橙	外・内面指ナデ	掘基道跡 SK65	PL10
DP11	円筒埴輪	[22.6]	(7.0)	1.6 ～ 1.9	－	(193.1)	長石・石英・赤色粒子・木炭	にぶい橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SE1	PL10
DP12	円筒埴輪	[18.0]	(6.1)	1.0 ～ 1.9	－	(81.3)	長石・石英	橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	表採	
DP13	円筒埴輪	[22.8]	(7.1)	1.0 ～ 1.8	－	(91.8)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SK65	
DP14	円筒埴輪	[24.0]	(9.6)	1.5 ～ 2.2	－	(122.5)	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	外・内面ナデ	掘基道跡 SK65 中層	
DP15	円筒埴輪	[17.8]	(6.9)	1.1 ～ 2.0	－	(120.4)	長石・石英・木炭	橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SK65	
DP16	円筒埴輪	[27.0]	(7.7)	0.9 ～ 1.9	－	(120.0)	長石・石英	にぶい黄橙	外・内面ナデ	攪乱	PL10
DP17	円筒埴輪	[21.8]	(9.0)	1.0 ～ 1.9	－	(194.6)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SE1	PL10
DP18	円筒埴輪	－	(3.3)	1.9	[13.8]	(46.4)	長石・石英	にぶい黄橙	外・内面ナデ	掘基道跡 SK67 中層	
DP19	円筒埴輪	－	(5.7)	1.5	[16.0]	(97.5)	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	表採	
DP20	円筒埴輪	－	(5.7)	1.6	[18.0]	(90.5)	長石・石英	にぶい橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SE1	PL10
DP21	円筒埴輪	－	(7.3)	(2.9)	[18.0]	(150.6)	長石・石英・赤色粒子・木炭	にぶい橙	外・内面指ナデ	掘基道跡 SK65	PL10
DP22	円筒埴輪	－	(7.2)	1.8	[20.0]	(178.1)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ　内面指ナデ	掘基道跡 SK65	PL10

2　その他の遺物

遺構外出土遺物

今回の調査で出土した本古墳に伴わない近世以降の遺物については，実測図（第35図）と観察表を掲載する。



第35図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	瓦質土器	灯籠	－	(5.1)	－	長石・石英	黒褐	普通	ロクロナデ	塚構築土	30%　PL10

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
2	陶器	秉燭	－	(5.8)	7.0	長石・石英 黒褐　明褐	ロクロナデ　底部回転糸切り　把手部欠損	鉄釉	－	塚構築土	30%　PL10

第4節 ま　と　め

調査の結果，古墳1基を確認した。ここでは，当古墳と大洗地区に築造された古墳や出土した埴輪ついて概観し，まとめとしたい。

現在の海岸線は，埋め立てが進み後退しているが，当時のそれは現在よりも陸側にあった。大洗町は大貫地区から磯浜地区にかけて太平洋沿いに古墳が数多く築かれており，当古墳もその一つである。当古墳の北東1㎞地点には，全長30ｍの前方後方墳である姫塚古墳，全長63ｍの前方後円（方）墳である坊主山古墳，全長103.5ｍの前方後円墳である日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳，直径88ｍの円墳である車塚古墳などからなる4～5世紀にかけて築造された磯浜古墳群が確認されている[1]。海岸沿いに立地していることから，外洋性の海上交通を意識した立地であるという見方[2]や，陸上交通と交わる意義などが提唱されている[3]。本墳もそういった見方が考えられる立地性を有している。

今回，古墳の周辺からは多くの埴輪が出土していることから，大洗地域から出土した埴輪についても触れておきたい。日下ヶ塚古墳[4]からは，平成25年度の調査で，円筒埴輪や特徴的な長胴化した壺型埴輪が出土している。当遺跡南東部に位置する釜堀遺跡[5]からは，形象埴輪と円筒埴輪が出土している。大洗地域の古墳の数からみると，埴輪の出土している古墳はあまり多くないため，当古墳出土の埴輪は貴重な資料である。当古墳からは，円筒埴輪のほかに多くの形象埴輪が出土しており，その中に器材埴輪2点が確認されている。当古墳から出土したDP 5は翳，DP 6は靫と推測される。茨城県において，器材埴輪の出土した遺跡・古墳は21 例程度[6]で，県内の古墳数からみると稀少な例である。さらに器材埴輪の中でも，靫が出土しているのは13遺跡，翳が出土しているのはつくば市中台2号墳[7]のみである。特徴的な翳形埴輪は，関東においては以下のような3形態が確認されている[8]。

1類　本体部が半円形を呈し，表面に放射状の線刻が入り，枠骨の表現とみられる。団扇型とよばれる。

2類　本体部の中央に円孔があき，外面の区画内に放射状の線刻が入る。

3類　本体部中央に円孔があき，外縁に鋸歯状の突起をもつもの。

以上の3分類に当てはめると，つくば市中台2号墳の資料は1類に，当古墳出土のDP 5は中央部の円孔や，外縁部に突起状のものがつく痕跡が確認できたことから，3類に該当すると考えられる。関東において，3類の形状が出土しているのは，埼玉県の円山2号墳，群馬県の西長岡東山3号古墳・藤岡市本郷遺跡などの6世紀代の古墳である。

今回出土した埴輪から，本古墳は6世紀前半に比定できる。大洗地域においては，磯浜古墳群などをはじめ，4～5世紀の古墳が多い。6世紀代の古墳は現在まで確認されていないため，調査によって明らかにされた資料が今後の研究の一助となれば幸いである。

註

1）大洗町史編さん委員会『大洗町史』大洗町　1986年3月

2）大洗町教育委員会『日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳』『大洗町文化財調査報告書』第18集　大洗町教育委員会　2015年3月

3）田中裕　「古墳と水上交通」『シンポジウム「東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク」発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会　2012年

4）註2に同じ

5）大洗町教育委員会『平成21年度大洗町内遺跡発掘調査報告書』『大洗町文化財調査報告書』第11集　2011年3月

6）茨城県立歴史館『平成25年度特別展　はにわの世界－茨城の形象埴輪とその周辺－』 2013年10月

7）吉田明宏　新井総　黒澤秀雄『（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集　1995年12月

8）北村哲『関東の器材埴輪』『栃木県立もてぎ風土記の丘資料館　第12回企画展　器材埴輪の世界－関東の器材埴輪－』栃木県教育委員会　1998年10月

写　真　図　版

髭　釜　遺　跡
行　人　塚　古　墳

髭釜遺跡出土遺物

PL1

調査区遠景
（西から）

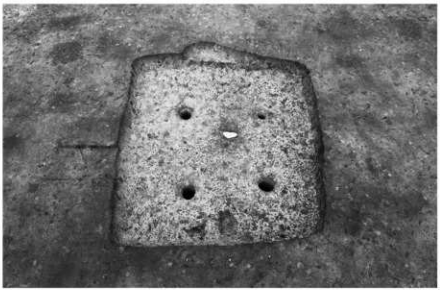
調査区全景
（上空から）

第1号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL2

第１号竪穴建物跡

第２号竪穴建物跡



第３号竪穴建物跡

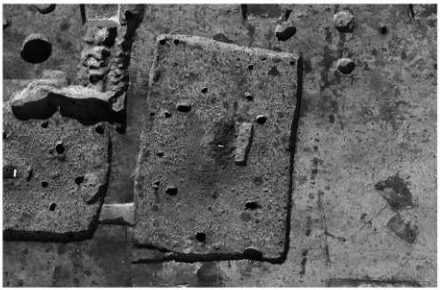
PL3

第４号竪穴建物跡
遺物出土状況

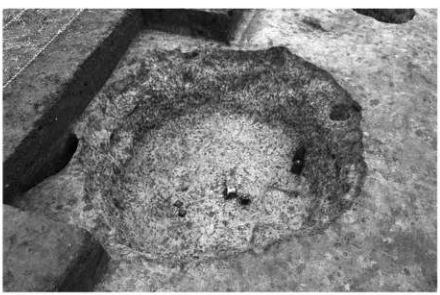
第４号竪穴建物跡

第７号竪穴建物跡
遺物出土状況

PL4



第８号竪穴建物跡



第 27 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 1 号 井 戸 跡

PL5

第４号竪穴建物跡，第27号土坑出土土器

PL6

第１～４・７号竪穴建物跡出土土器

PL7

SI 4-42

SI 1-2

SI 1-1

SI 2-14

SI 4-30

SI 2-22

SE 1-60

SI 4-DP 1

SI 7-DP 4

遺構外-DP 5

第１・２・４・７号竪穴建物跡，第１号井戸跡，遺構外出土遺物

PL8

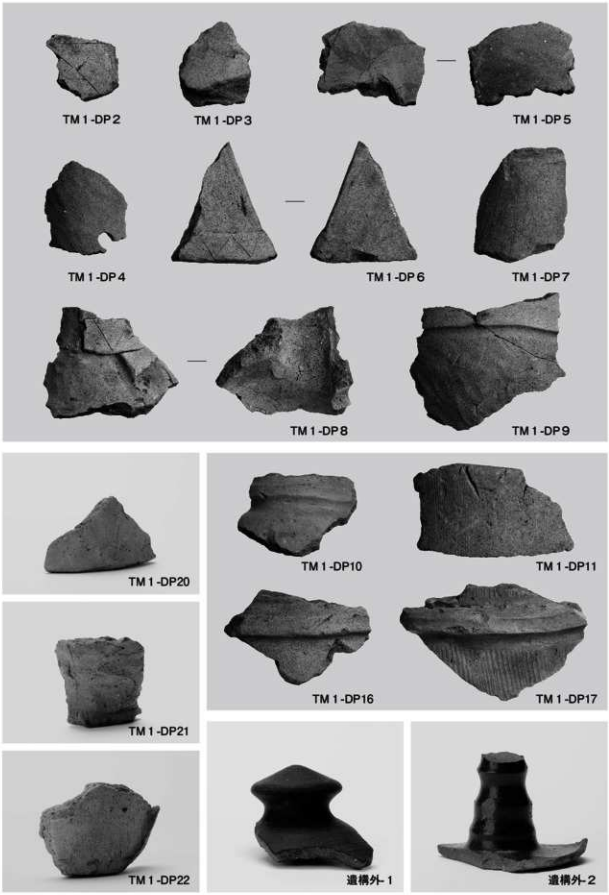
第１～４・７号竪穴建物跡出土石器，遺構外出土金属製品

第　1　号　墳
全　　景

第1号墳・第65号
土坑（髭釜遺跡）
土　層　断　面

第　1　号　墳
土　層　断　面

PL10



遺構外出土土器，第 1 号墳出土土製品

抄　　録

ふりがな	ひいがまいせき　ぎょうにんづかこふん
書　　名	髭釜遺跡　行人塚古墳
副 書 名	都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第421集
著 者 名	天野早苗
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL 029－225－6587
発 行 日	2017（平成29）年3月17日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
髭釜遺跡	茨城県東茨城郡大洗町磯浜町1358番地ほか	08309 － 022	36度 18分 51秒	140度 33分 51秒	7 ～ 9m	20151201 ～ 20151231 20161101 ～ 20161231	190㎡ 1074㎡	都市計画道路駅前海岸線整備事業に伴う事前調査
行人塚古墳	茨城県東茨城郡大洗町磯浜町1113番地の1	08309 － 071	36度 18分 46秒	140度 34分 00秒	7m	20151201 ～ 20151231	190㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
髭釜遺跡	集落跡	弥生	竪穴建物跡　8棟 土坑　1基	弥生土器（高坏・浅鉢・広口壺） 土製品（紡錘車） 石器（石皿・磨石・敲石・台石）	
		室町	井戸跡　1基	土師質土器（小皿） 陶器（鉢）	
	その他	不明	土坑　65基 溝跡　2条	弥生土器（広口壺） 埴輪（形象・円筒）	
行人塚古墳	古墳	古墳	古墳　1基	埴輪（形象・円筒）	

要　　約	髭釜遺跡は弥生時代後期後半の集落跡である。今回の調査区は集落の東端にあたると考えられる。行人塚古墳は6世紀前半に築造された古墳である。墳丘部は後世に削平を受け，盛土をされ塚として利用されていた。

印　刷　仕　様

編　集	ＯＳ	Microsoft Windows 7
		Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film　EPSON GT-X980
		図面類　RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　刷	印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第421集

髭釜遺跡　行人塚古墳

都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年　3月15日　印刷
平成29（2017）年　3月17日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http://www.ibaraki-maibun.org

印刷　いばらき印刷社
〒319－1112　那珂郡東海村村松字平原3115－3
TEL　029－282－0370